
私の魔法学校体験奇

横山 楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の魔法学校体験奇

【Nコード】

N5557U

【作者名】

横山 楓

【あらすじ】

私、かみやますみれ神山董は普通にくらしてたのに異世界？魔法学校？いやありえないだろう。いや確かにファンタジー小説大好きだけれども！チートかチートじゃないか分からない、女の子の話です！

意味がわかりません。(前書き)

初めての投稿作品です。

温かい目で見てください。

意味がわかりません。

「失礼ですがお母様いまなんと？」

私は、思わず聞き返した。

「もうだからあ転校するから」

そう、ここまではいいい（まあこれも充分よくないのだが）。問題はその次の言葉だ。

「魔法学校に」

「・・・えつとそれは小説か何かの主人公が？」

「なにいつてるのよ董にきまつてるじゃない」

「お母さんいますぐ精神科に」

「あらあお母さん至って正常よ〜まあ異世界にあるんだけど〜全寮制でね〜お母さんも卒業生で董にはいつてなかったけど魔法使いなのよ!どう!」

「すぐくないお母さんかつこよくない!」

「いやいやいやおかしだろ!魔法って!えっなに?どっきりどっきりなの?!」

「ちがうわよもういいじゃない董ファンタジーものとかそういうのすぎでしょ?」

そんな首かしげて?みたいな顔されても!

「いやちよつなっああもうなんかちがうだろ!」

ありえない魔法学校とか異世界とか!

いやファンタジーものは好きだよ?! 大好きですけどなにか?!

「いっしょじゃない。とりあえず決定事項だから」

はい?! いやそんな満面の笑みで何を言ってるんだこの方は?!

「1週間後だからがんばってね」

意味がわかりません。(後書き)

ここまで見てくださった方ありがとうございました！

どちらさまですか！

はい私はいま絶賛現実逃避中です

さっきのものすごい爆弾発言から逃げています。

いまは弟の誠が母からさっきの話を聞いている。

反応がにすぎてさっきの自分を見ているようだよ。

とか血のつながりをかんじて油断をしていたらつかまってしまった。

「あ董いまからお客さんが来るから」

「お客さん？じゃ私は部屋に逃げ」させないから
は？」

「董にも関係あんのよ」

「関係ってまさか」

「そ、魔法学校のこと」

どうしようすんごいやだ。

部屋にこもりたいこもりたいが母の目がやばいこわい。

ピンポーン

チャイムが鳴った

くるの早すぎだろう聞いてから3分もたつてないぞ。
と考えてるうちに母とお客さんの足音がする。

ガチャ

ドアがひらいた。

「これが娘の董です」

母よこれってなんだこれって。

そして私はお客さんを見た。

うんまあ簡単にいえばイケメンだよな。

男の人で年は22〜3ぐらいだろう。

私が今までであったことのある男の人のなかでだんとつでトップだろう。

あまり明るすぎない茶髪に印象のいい微笑み。

私はおそろおそろ挨拶をした。

「は、はじめまして」

彼は微笑みながら。

「はじめまして時田秋史です神山董ちゃんだね」

これが彼との初めての出会いだった。

展開早すぎじゃないっすか？

「じゃあ董ちゃん今から行けるかな？」

「は？」

「あれ？百合さん説明は？」

「あら董ちゃんさっき説明したじゃない」

「1週間後って」

うんさつきお母さんは1週間後と聞いたはずだ。

というかそれすら認めてないのになんだいまからって。

「それは魔法学校でしょ？言ってなかったかしら？今から学校にくまで董ちゃん秋史くんのところについてもらうから」

「百合さん説明してなかったんですか？！」

時田さんも驚いてる。

よかった時田さんは普通の人だ。

「うっかりしたのよ」

うっかりで済む問題じゃないぞ母よ。

「じゃあ董ちゃん荷物まとめてきなさい」「は？」「じゃあ秋史くん久しぶりにお茶でもしましょうー！」

「いやちよっまっお母さん私いや」「董？」「じゃないですせんせん」

目が怖い目が怖い。とりあえず部屋に行こう。

(どうしよう荷物まとめたほうがいい？でも何かいくってみとめた

みたいでやだ)

とまあ部屋でいろいろ考えていたら。

「姉ちゃん?」

「ん?どしたの誠」

「母さんが30分でおわらせないと小説とマンガ全部燃や」今すぐまとめます」

うそっばいがあの母ならやりかねん。

「よし誠手伝えとりあえず小説とマンガ全部いれて」

「は?やd「え?いまやだっていおうとしました?いまからいくつて言われてパニくつてる姉ちゃんに?自分は来年で1年も理解する時間がある弟が?わーひどい、悲しい。腹いせに誠くんが大好きなかわいい幼馴染の雪ちゃんに誠くんの恥ずかしい秘密を「すいませんマジで手伝うんで言わないでくださいお願いします」

「よしじゃあやるかってあと10分?!
ちよ早くしないと」

とまあそんな感じで弟の手を借りて何とか済んだ。

しかし本当に行くんだよなわざわざ荷物もまとめたしでもまだ高校いって1カ月もたつてないんですよ!?

あっち行ったら友達とたまにあったり電話とかできるのかなとか考えてるうちについてしまった客間に。

「あのーすみましたけど」

「ああじゃあ荷物はどこかな?」

「えと部屋に置いてるんですけど」

「じゃあ案内してもらえる?」

「はい」

母と秋史さんと私で部屋にむかった。

「荷物はこれで全部かな？じゃあ車に持っていくね」

「はい、でも結構量ありますけど・・・」

「ああそれなら大丈夫小さくするから」

「え」

「ほら」

「はっえっ荷物どこ?!」

いやまてこの人は母の知り合いで魔法学校話の関係者そして今のを見たらまあ考えなくてもわかるが。

魔法使い

「・・・うっそこんな普通そうな人が（まあ顔が普通じゃないけど）?!」

「ははっひどいな」

で、秋史さんは小さくなった荷物を箱にいれて。

「これだったら簡単に運べるでしょ?」

と、ものすんごいカッコいい笑顔でほざきやがった。

「あ、董これ新しい携帯ねあっちにいつてもつかえるから」

うれしいんだけどなんか悲しい。

「じゃ董がんばるのよ」

「姉ちゃんがんばれよ」

いたのか弟よというか展開はやすぎじゃないか？
まあそれより

(や、やだぁー)

とうとうきました(前日)

なんだかんだで明日異世界にいつていろんなものを買っらしいです。入学式(こつちとは1カ月入学の日がちがうらしい)の前の日に買うもんじゃないだろうと思ったがまあ今までのことにくらべればかわいもんですよね。

そして秋史さんとはかなり仲良くなりました名前呼び方とか話し方とかも結構変わった。

あとなんかもういろいろと1日寝たらすっきりしているんなこと受け入れましたうじうじしてるのもらしくないからね!変なところでポジティブなんです私!

まあ入学式までの期間は魔法の軽い基礎(入学する子はだいたいみんな出来るらしい)を教わりました。

うんスパルタだった仲良くなってからは喋り方もわかってさらにスパルタで怖かったよ。

学んだのは魔法は想像が大事だとかいろいろと私が得意なのは血をたらして想像したものを作ったり何か物にたらしてそれを操ったりだとか、声に魔力をのせたり足や手に魔法をのせて使ったり(まあ蹴ったり殴ったりした物が氷ったり燃えたり)だとか、だからまあ最後のほうは武術学んだけどね?!べつに手から出したりするのに憧れてなんかないんだからね?!ふん!

私は魔力がそこなしにあるらしいでも細かいというか繊細なものが私がしたい魔法ではつきり言えばへったくそだった。

火を的の真ん中ねらってうってても的全体が燃えるし魔力の調節ができないおちこぼれだった。

逆に得意なのは自分で言うのもなんだが結構できるほうだとおもう(これに関しては秋史さんもほめてくれた)。誰にでもできそうだが普通は魔力の濃さに血もかなりの量を使わないといけないし足や手に魔力も長時間持続は難しいらしい(私はぜんぜん大丈夫だった)

た（声も相手に届くまでにむだにつかたりするので私が得意とするのは一般的じゃないまあ簡単にいえば大雑把な魔法らしい。

といろんなことをベットで考えていたが。

（まあ明日がんばろうよしっ！ねるっ！）

とつとつきました(前日)(後書き)

短くてすみません

とうとうきました(前書き)

きづいてる方もいると思いますが、私はだいたい。や、はつけていません。

みにくい、不快に感じる、つけてほしいという方は教えてください。そして私の小説を読んで改善点などがありましたら気軽に教えてください。

とうとうきました

きた。来たぞ異世界！

何かわくわくしてきた！

異世界へは望みの鍵ホープキーでできた。

なんと過去、未来じゃなくちゃんと想像できたらどこへでも行けるらしい（そんでさっきもらった。アンティークですごく可愛い鍵だった。持ち歩けと言われたのでネックレスにしよう）今いる場所は異世界の秋史さんの家だ。

「よしっ行こう早くでかけよう！」

「おまっテンションたかつ」

ハイ皆さんお前誰だよって思った方もいらっしやると思いますが秋史さんですよ。

最初の優しい口調がなかよくなって変わりましたよいいことなんだけどなんだかな〜まあかつこいいからどんな口調でも似合うんですけどね。ははは、美形うざい。

「行く前にこれきろ」

「ぶっ」

「フードもかぶれよ」

フード付きローブを投げられた。顔に投げなくてもいいだろう。

投げるならせめて「はいパルス。ナイスキャッチ！」みたいなので投げてくれ。

「なんで？まあきるけど」

「一応変装するけど、もしもの時俺と歩いてるのがばれたらやばい

んだよ」

「・・・自信過剰？」

「どつという意味だ？」

嘘です冗談ですすいません。だから目が笑ってない笑顔をむけないでくださいお母さんとダブってみえます。

「大丈夫じゃないですか？兄妹ぐらいにしか見えないと思いますけど」

「・・・何の話だ？」

「え？だから秋史さんと二人で歩いたら周りの女性から嫉妬されるから変装するんじゃないんですか？」

「まあたしかにそれもあるがって冗談だよだからそんな冷めた目でみんなつてせめてつつこめ俺が痛い奴みたいじゃないか」

「だって秋史さんナルシス「自分の容姿を自覚すると言え」なんだろう確かにその通りなんだけどいらつときた」

「まあ俺はけつこつ有名な魔法使いなんだよだから普通に歩いてたらやばいんだよ」

あれか芸能人が町歩くみたいな。

「じゃ変装するか」

「え」

ボンッ

いきなり音とともに煙が現れた。

「ちよつ秋史さんってあれ？秋史さん？あれっいない？！」

「ここだよここ」

「じじっつてどじっつ!」

どこからか秋史さんの声が聞こえた。

「下」

「下?」

下を見たが猫がいるだけで秋史さんはいないって猫?

「ま、まさか・・・」

まさかいやでも秋史さんは魔法使いだそれに毛並みは濃い茶色。

「秋、史さん?」

「ああ」

・・・

「ええーっつそえ、猫?というか変装じゃなくて変身じゃん!」
「だって変身するって言うの恥ずかしんだよ!」

まあたしかに。

「じゃあそれでいくの?」

「ああ」

「ローブきればよかったじゃん」

「こっちのほう及安全だろ」

もっとほかのもあっただろう。と思ったが言うのはやめておいた。
まあ猫が思いのほかかわいかったからなのだが。まあこれで外に行

ける。異世界はどんなところなのか楽しもうじゃないか！

「よしじゃあいか」

とろとろきました(後書き)

明るすぎない茶色を濃い茶色としました

あ、なんか異世界！（前書き）

「みてみん」に「私の魔法学校体験奇」の登場予定キャラなどを投稿してしますので、暇な方は見てください！名前は同じです！

あ、なんか異世界！

いやあ、異世界すごいね！

ホウキとか教科書とかスティックとか買ったよ！

スティックなしでもできるけど（こっちの人は結構慣れてるので入学するぐらいの人はいらなんだって）私は魔力の調整へったくそなんでよかったよ、まあ使うのはちっちゃな子供ぐらいらしいけど（基礎など生活の中で使うぐらい）まあしょうがないよね！

今はお昼ごはん食べてます！おいしいね！というか私周りから見たら猫とご飯食べてる（しかも店の中で。秋史さんイスに座ってるし。私真つ黒なローブ着てフードかぶって顔見えないし）感じじゃない？周りの視線がちよっといや結構痛いよ。

「ねえアッキー」

「誰がアッキーだ」

「猫に秋史さんって呼ぶの可笑しいでしょ」

「いやでもほかに「あのでっかい城みたいな建物何？」

「あの言葉かぶせないでください」

「で何？」

「・・・ロード学校。」

「ロード学校？どんな学校なの？すごいでかい」

めっちゃでかい、半端なくでかい。

「魔法を主にしてお前が明日から通う学校だ」

「へーそーなんだ！。って、は？あれ？あのでかいの？えっちよっほんと？！でかっ！あんなにでかなくていいだろ！？てかロード学校っていうの？！」

「俺はおまえが学校名を知らないことのほうが驚きだ」

だつてみんな魔法学校つていうじゃん。

「まあいい食べたか？」

「ん？うん」

「じゃあいくぞー！」

「あつ、まつてその前にキャットフード売ってる店こころ辺にない？」

「・・・なんでだ？」

「えっ？アツキーのえ「くわねえーよ！このばかつ！」

「えっじゃあえsごほんつご飯は？」

「おいまてこら、今お前えさつて、えさつていったよな？いったよな？」

「いつてない、いつてない、言いかけただけ。」

「かわんねえーよ！」

「わかるわかる。で？ごはんは？」

「いい。腹へつてないし。」

(・・・)

「しね。猫」

「えっなんで？どこにきれる部分あつた？そして呼び方がさらにひどい」

「おまえさあ女の子が食べた後に、自分は腹つへつてないから食べないって何？嫌味？それにお前朝食食べなかつたらー！うっぜえ！」

「ええー！ー！りーふー！じーんー！別にいいだろっ！それに嫌味とか考えすぎだろっ！人の勝手だしじゃあなんていやあいいんだよ！」

「何も言つな！無理してくえっ！「おなか減つてないから」が通用するのはデザートだけなんだよっ！」

「こいつめっちゃ自分勝手！」

「それが女の子なんだよ！」
「もーなんなんだよおまえっ！」

相手が女の子でも私だけ食べるってあれだねっと思って思っのに男だったら尚更なんだよ！

「いいよ食べるよ食べりゃいいんだろ！」
「じゃあキヤットフード「食べねーよ」「チッ」
「えっちよっ今、舌打ちしたよなお前？」
「しましたけどなにか？」
「開きなおんな」

といういざこざがあつてこちら辺の町の説明がおして帰りが遅くなつたという。

まっいよいよ明日入学式！

あ、なんか異世界！（後書き）

まあ学校や町はハリポタみたいな感じですよ。

ああ、もうちょっと話すすんでたら七夕話かけたのにつ！くそっ！

変なところで王道きたわー

どうしようきた、きちやった入学式！

やばい心臓やばいありえないほどバクバクしてる。

そして周りカラフル（緑とか青とかもうやばいだろ。そして皆似合ってるって言う）私もう無理かも、人見知りだし。もうやばいやばいやばいやば「はじめまして」

「えっ」

・・・どこの美人さんーっ!?

そこで王道きちやうか！

えっなにめっっちゃ美人、いや美人というよりかわいい。

「あっこん、に、ちは」

「よろしくね」

「は、い」

笑顔がまぶしいっす。

そして金髪碧眼。

もうかわいいなあ！

でも私人見知りー！

ほらもう、私気の利いた返事返せなくて話し終わるし。

ココに知り合いとかいたら話せるのに。

「では、皆さんいきますよ」

えっもう！やだ・・・。

なんかこれからどこに属するか決めるらしい。

ベルエトワール

リリー

カメラア

ローズ

のうちどれか。

決め方はすぐきれいなガラスの杯に手を触れそしてその中の水の色が変わり色によって決める。

どうしようことうときって順番とか早く感じるよね。

前だった人たちはどんどん決まってそれぞれのネクタイ（それぞれ色が違うので決まってその場で渡される。入学証明書みたいなかんじ）をわたされる。

無意識にローブを握る。

（ん？あつブローチ・・・）

昨日あつきーに渡されたブローチ。

『ブローチ？』

『ああ。それを毎日付けとけ』

『毎日？』

『できるだけ周りから見えないようにだ。服の裏にでも付けとけ。いざとなつたときまあたぶん役に立つから』

『いざ・・・』

『そのときは人や知能があるもの場合は表につけるなり何なりして相手に見せる、それ以外は握りしめて強く念じる』

『んーわかつた。ありがとうあつきー』

『定着させんな』

そっぴやあつけてから存在忘れてた。

「神山董さん前へ」

「はいっ」

きたっ！

「では杯に触れてください」

おそろおそろ触れる。

(もつそろそろだね?)

杯を見つめる。この色は・・・

「神山董は本日から

ベルエトワールに属する!」

「ではこれを」

ネクタイを渡される。白地に黄色のストライプ模様だ。
これで今日から私はここロード学校の生徒・・・。

変なところで王道きたわー（後書き）

4つともそれぞれ花の名前です

校章（下）とブローチ（上）です。あと校章これ書いたときリリーがマーガレットの予定だったのでMになってますが、MじゃなくてLです、すいません > i 2 6 9 2 8 | 3 4 9 2 <

ひつとみっしり〜

「私リディア・ルドへキアっていうのよろしくね!」

「あ、はい神山董です・・・」

「よろしくね。あつ董ちゃんって呼んでいい?」

「はい」

イスに座つたらあのかわいい子の隣でした。同じだったんだね。だめだやばい緊張する。

「リディア」

「ロド!ジン!」

「入学おめでと」

なんかまたかつこいいのきたー!ー!ー!
やめてよもう美形率高いつて。

「隣の子は?」

ほらこういうときって知り合いが話してた子にも話しかけるんだもん。7割ぐらいで。

「董ちゃんっていうの!今日初めて会ってね、隣なの!」

かわいいな〜私女の子に弱いんだよな〜。

「初めましてロド・マクリーンです」

「ジン・サイメリアだ」

「はじめまして、神山董です」

えっとロド・マクリンさんが茶色髪、眼の王子様風イケメン。もう一人のジン・サイメリアさんが黒髪、赤眼のあっちが王子ならこっち魔王風みたいなほら切れ長の眼に涼しい顔立ちみたいなの。3人が話し始めた。私無視してほしかったがちよいちよい話しかけられる。緊張して気の利いた返しができず気まずい空気になった時。

「では入学生のみなさんを先輩の方は教室、寮の場所の案内、説明をしてください」

教師の人が話をした。

ナイス教師！

よかったほんとによかった。

教室などの説明をして最後にベルエトワールの寮の説明を終えて各自の部屋にみんな行って私も行こうとしたら、

「董ちゃんって部屋どこ？」

とルドヘキアちゃんが話しかけてきた。

「えっと、118で、す」

やっぱり緊張するし。

「ほんと！！私も118なんだ！よかったー董ちゃんと一緒に部屋一緒にいこうー！」

「あ、はい」

「あと、董ちゃん敬語使わなくていいよ？」

「あ、えつと努力します・・・」
「うん！」

そして部屋に行った。

部屋は二人部屋でキッチン付き、トイレ、お風呂別リビングに二つ部屋が付いている。

・・・

良物件か！ありえなだろ！
なんかもう疲れた。

「あつ夜ごはんも一緒に行こうね！」
「はい・・・」

朝、昼、夜すべて学校側が用意してくれる。じゃあキッチンなんのためだよ！って思ったなら部屋で自分で作って食べてもいいらしい。まあここのは、豪華でおいしいバイキング形式なのでめったにないらしい。

とりあえず部屋に行った。

私の家の部屋と大きさは同じぐらいだ。

荷物は持ってきたのは鏡（かなり大きい）だけだ。他の荷物はちょっとだけいたあつきーの家から移動させるらしい。

あつきーがいうには鏡を置いてたしか・・・

「鏡よ、我が望む場所につなげ」

ちよつと恥ずかしい（無独唱はできない）

すると鏡に映る私が歪み他の何かを映す確かアッキーの部屋だアッキーが見えた。ソファーに寝ながら小説をよんでいる。くっそ絵に

なるな。

「あつきー」

「お、繋がったか」

鏡の前へ歩いてくる。

そしてイスに座った。

私はこれを見たときナルシスともここまでか、と言ったらたたかれた。だって勘違いするよね！

「でどうするの？ここあつきーの部屋でしょ？私の荷物はほかの部屋に置いたよね」

部屋が有り余ってる（金持ちがつ！）のでほかの部屋に棚も家からもってきて本や雑貨などを整えておいた。

「それなら」

あつきーがしゃべると同時に部屋が変わった。私の荷物がある部屋だ。

「よし運ぶか」

物が浮く。

「えっちょ鏡に入らないんじゃないんすね」

鏡が物に応じておおきくなっていく。

「で、どこに運べばいい？」

「えつとそこに」

そしてスムーズに進み

「終わったー」

「お前指示しただけだろ。何疲れたみたいな顔してる」

「うっせ、雰囲気出すためだよ」

そして荷物移動もうまくいきご飯を食べに行って学校一日目は終わった。

なんか疲れた・・・。

8話目の没バージョン「奇妙なつながり」(前書き)

8話目にしようと思って書いたやつです

没理由は何となく思い描いてる先の話につなげられるかが微妙だったからです

でも最後まで書いてもったいなかったんでのせます

8話目の没バージョン「奇妙なつながり」

「私リディア・ルドへキアっていうのよろしくね!」

「あ、はい神山董です・・・」

「よろしくね。あつ董ちゃんって呼んでいい?」

「はい」

あのかわいい子の隣でした。同じだったんだね。だめだよばい緊張する。

「リディア」

「ロド!ジン!」

「入学おめでと」

なんかまたかつこいいのきたー!ー!

やめてよもう美形率高いって。

「隣の子は?」

ほらこういうときって知り合いが話してた子にも話しかけるんだもん。7割ぐらいで。

「董ちゃんっていうの!今日初めて会ってね、隣なの!」

かわいいな、私女の子に弱いんだよね。

「初めましてロド・マクリーンです」

「ジン・サイメリアだ」

「はじめまして、神山董です」

えっとロド・マクリーンさんが茶色髪、眼の王子様風イケメン。
もう一人のジン・サイメリアさんが黒髪、赤眼のあっちが王子なら
こっち魔王風みたいなほら切れ長の眼に涼しい顔立ちみたいなの
で、2人が話し始めた。そう2人、3人じゃなく。

もう1人ジン・サイメリアさんがこつちめつちやみてます。見つめてるとかじゃなくって。失礼ですが目つきがこわいつす。睨まれてるんでしょうか。

えっ私なんかした？何もしてないよね？とりあえず下をむいて顔をそらしてるんですが気まずい。

あの二人前の席なんだよ、しかもサイメリアさんが私の前。

「あのージン？」

「・・・」

「おい、ジン？」

ルドヘキアちゃんとマクリーンさんが話しかけても無視。

「おまえ」

「では入学生のみなさんを先輩の方は教室、寮の場所の案内、説明をしてください」

サイメリアさんが口を開いたときにちょうど教師の人が話をした。

何をいおうとしたのか、きになるがナイス教師！

サイメリアさんは少し眉間をよせたが何も言わず案内にはいった。

最後にベルエトワールの寮の説明を終えて各自の部屋にみんな行き私もルドヘキアちゃんと（同じ部屋だった）行こうとした時

「おい」

腕つかまれたあー！

「ジン？」

マクリンさんが怪訝そうな顔をし、ルドヘキアちゃんが隣で驚いている。

私は

「なな、なんでしようかつ」

パニくつてた。。

「お前ファイリア・サイメリアって知ってるか？」

「へっ？」

ファイリア？知り合いでそんな名前の人・・・いたわー。

めっちゃかわいくてお母さんの知り合いで私も仲のよかつたでも。

「なんで知って・・・」

「知ってるんだな」

「あ、はい」

待て、ファイリアさんとお母さんは老化なんて知らないってぐらい若くてめっちゃきれいだ（私は似なかつたんだよ！弟は母似なんだけどな・・・）あっきーに魔力によるが、魔力があるものは長命である程度の年齢で成長がゆつたりになるらしい。ということは、ファイリアさんはこつちの人で私の話をするぐらい仲のいい人

「ファイリアさんの彼氏！？」

「なぜ、そうなる！？母親だ！」

(. . .)

「息子?! うっそ」

「母が百合さんと遊んだ時に写真を見せたんだよ」

母よ何気にこっちにきて結構遊んでるのか。

「さっきは見覚えがあると思ってみた」

「そうですか」

なんかもう疲れた。

疲労感半端ない。

「じゃあふたりは母親同士が知り合いなんだ」

あっそういえば空気だったなこの二人。

「えっともう部屋に戻っていいですか・・・」

「ああ、ひきとめて悪かった」

「いえ・・・」

へんなつながりをみつけて学校一日目は終わりました。
つかれた・・・。

えっちよっ何？

「で、どうだ？学校は、」

「まだ慣れない」

ええ。もう1週間経つんですが。

移動中 一人。

「・・・」

「無言って」

授業中 隣と話もせずまじめ。

「うん、まあまじめでいいんじゃないか」

「・・・」

休み時間 読書。

「これはまああっちでもだったな」

「え、お前ほんとに女子高生？」

「失礼な。友達と話すときもあつたぞ」

「おまえさびしいな」

「うっせえ」

「お前、こっちで友達どうやって作った」

「普通に？」

「なぜそれがあっちでできない」

「！はは・・・別に」

(・・・)

「確かよく話しかけてくれる子がいるんだろ？」

「えつまぁ」

「その子とは？」

「うん・・・まぁほどほどだよ・・・」

「・・・おまえ　　まぁ今日はいいい」

「?どしたの？」

「あした鏡で連絡取れ。」

「んーわかった」

「じゃあな。おやすみ」

「おやすみー」

なんだっ たんだ？

気になるけど明日話すんだしいつか。

えっちょっと何？（後書き）

短すぎてすみません

あと二話更新するのでこんな長さを・・・

居場所

「で？なにあつきー？」

やっときける。地味に気になつてた。

「んー？まあちよつと大事な話を。董、お前あつちになかなかない、つて言つてたよな？」

「う、ん」

いやな予感がする。

「なれないんじやなくて、

聞きたくない

なれたくない。」

だめ・・・

(それ以上)

「おまえは、この世界を無意識に、

(言わないで)

拒絶しているんじゃないか？」

そんなこと、きずかないで・・・

凶星だった。

どこかで分かってたちゃんと。

どこか感じていたんだ。私がこちらで出会った人に対する拒絶。

壁。

あちらでは確かに人見知りではあったけどルームメイトの人と1週間もすごして仲良くなならないほどではない好意的に話しかけてくれた人に対しては仲良くしようとしていた。

怖かった

あちらとこちら。

裏と表。

科学と魔法。

反対でありながら限りなく近い関係鏡のような関係。私にとっての異世界と世界限りなく近く。

- 反対だった

私にとってこちらは言葉も字も人もいっしょだった。

一緒なのに初めてみるもの、常識あたりまえがあたりまえじゃない。楽しもうと思っただわくわくもしたでも恐怖があった。

私の今までのものが壊れるようだった。

知り合いもいなくて悲しいでも知り合いができてしまったらこちらになじみ今までの私が不安で。

言葉も字も人もいっしょで幸せかもしれないでもそれがいっしょなのになぜ？と私がおかしいと思ってしまう。

だから、

- 拒絶した

私をたもつために。

あちらが私の場所でこちらに私の場所をもたないように。どちらも楽しみたかった。

私は器用じゃないからどちらも楽しもうとして両方失ったら？
どちらも楽しめたらどちらを選べばいいの？
だから元の場所を守った。

居場所（後書き）

ちよつとシリアスになつたな

私（前書き）

お気に入り登録、評価をしてくださった方がっ！
見てくださってる方も本当にありがとうございます！
挿絵追加しました

私

私は夢を見た

黒髪の美しい少女が優しい微笑をたたえながら。

ある、物語を紡ぐ『少女』の物語を。

鳥籠の『少女』はある日そこを出てしまったたの。
鳥籠の中は自由じゃない？確かにすべて自由とはいかなかった。でも幸せだったの。

「自由」その言葉は甘くひどく魅力的な蜜。

ある日鳥籠の扉があいたの。

- その鳥籠は捉えるためではなく守るため
- その鳥籠は『少女』を止める最後の防壁

- その鳥籠は冷たい檻ではなく暖かい私の「居場所」

分かっていたの、知っていたの。

- でも・・・

『少女』には、その甘く魅力的な誘惑は耐え難かった。
出てしまったの。鳥籠を。

誰に強制されたわけでもない、中と外。それは『少女』が選べるの。

だけど・・・

未知と既知。その鳥には未知の恐怖、既知の安心それよりも。

「自由」

それは甘い誘惑

それは甘い魅力

それは甘い蜜

その言葉は鳥籠の『少女』にはあまりに甘美。

その言葉は鳥籠の『少女』にはひどく危険。

甘い蜜その副作用にその『少女』は耐えられるかしら？

でもね、その鳥の心が自分の、

恐怖、安心

危険、安全

- 不幸、幸福

自分の意思を貫けるなら、

- どんな場所でも

- どんな状況でも

- 「私」が幸せだとおもえば幸せ。

そして、「繋がり」を。

「1人でだめなら2人」簡単なことでも難しいこと。

「繋がり」は、

- 「あなた」と「私」をつなぐ鎖

- 「あなた」と「私」を縛る糸

でも「繋がり」は暖かいの。やさしいの。うれしいの。

魅惑の蜜に惑わされるのも結構。

でも「繋がり」に恐れなくてむかってみてそしたら籠などなくても

幸せになれるかもね？

> i 2 7 1 6 0 — 3 4 9 2 <

貴女は、だれ？これは、夢？そう、夢、不思議な夢なの現実のよう
に忽然でいて脆く儚い幻想のような
おぼろげな記憶をたどり物語を私は緩やかに毅然と紡いでいく。

貴女は、だれ？少女は、私？

「あーもううぜえ」

「・・・」

「どーせ居場所がどうこうとか考えてんだろ」

「なん、で」

「こつみえて俺もロード学校、董と似たような感じではいったんだよ

で、そのときの俺とにたようなかんじだからお前」

「だったらわかるでしょう？私がどれだけ怖いか」

こんな気持ちこんな時ぐらいかんじたくないのに。

「まあ俺は怖いというより気持ちわるいだったが。

そんなお前にアドバイスだ」

「？」

訝しげに秋史さんを見る。

「難しく考えんな。今を見る楽しみ。両方居場所を作ればいい。怖いなら俺もいるし友達だって家族だっているだろう？お前は将来も楽しく今も楽しくする方法を考えてるほうが似合う。それにどちらかなんて選ばなくてもいいだろう」

「でもどちらもは」

好きになっても一方じゃなきや。

「あのなあ忘れてるようだが望^{ホー}み鍵^{プキ}があるんだぞ？」

鍵？ 鍵って

-
.
.
.
.

「ああー忘れてたああー」

「それになくてもお前は血で作れるだろ？鏡もあるしというか今現在つかつててなぜ忘れる？」

「えっじゃあこのシリアスマードは」

「ただのお前の無駄な勘違いだな」

「えっちよっ私はずっえっいつでも行き来できるの？！」

「できるぞー」

「ちよっ待て、てめえいつからきずいてた」

「最初から」

「うっそおおーいーえーよー」

「思いのほか面白かったんだよ」

なんて無駄なシリアスマード。

なんて私恥ずかしい奴でも。

「ふっふふははは」

「おい？」

「あっはははーははは」

「ちよっ怖いぞお前」

(まあこれで楽しめるだろう)

「秋史さん」

「んー？」

「ありがとう。さすがお兄ちゃん！」

「まあーな妹」

すっきりした心が軽い。

目の前が明るい。

難しく考えずに楽しく考えようそれが私らしい。

こっちに来て初めて心の底からこれからが楽しみだ。

私（後書き）

シリアス台無しですねー

ちなみに「みてみん」にネクタイとかアップしたんで、見てやってください小説のタイトル検索したら出ると思います。校章とか挿絵とかは場面になったらこっちに乗せます。ネクタイは載せなくていいかな、と思って載せませんでした。

あと、いつもは董携帯で連絡とってます。メールは苦手設定なんで（どんな設定だよ）基本友達とは電話です。

挿絵の女の子は話と無関係です、まあ謎の絵本読みです

7/27 最初の話ちょっと変えました、これからにかかわっていきます、挿絵の少女関係ありにしました

疲労感半端ない(前書き)

なんとPVが10000アクセス超えました！
本当にありがとうございます！

疲労感半端ない

うん、朝だ。おはようございます。

昨日いざござあつてなんか、かつこよく楽しみとかいったが、やっぱり緊張というかね。だって今まで軽くさけてたからさ、なんて仲良くなればいいか。

しかも時間だしそろそろでなきゃ。

(おはようっていうおはようって、ちゃんとあっちでしてたみたい
に)

席に着いたら自分から言おう。

なんか友達と喧嘩してたときみたいだな。だいぶ前だけど。

「あつ董ちゃん」

「おはよう」

ひきつってないよな笑顔、ちゃんと笑ったよな、うん。

「えっ」

驚かれたよ。まあいままで敬語であいさつも言われたら返すだけだったしね。

我ながら態度わるいなーそして周りがざわついて「あの子から挨拶を」「やっと敬語が」「とかいってるけどきにしない、ルドヘキアちゃんにやったな！って視線もあるが私にはちょっと冷たい視線のほつがあるがきにしないもん。

「お、おはよう！」

「おはよう、神山さん」

「・・・おはよう」

「おはようございます」

マクリンさんとサイメリアさんも挨拶をしてくれた。

そして朝ごはんを食べていたらなんかめっちゃ話したそうなルドへキアちゃんが口を開いた。

「えつとあの董ちゃんなんかいつもと違うね！」

「んー昨日兄みたいな人と話したらすつきりしてね」

「みたいなの？」

「うん」

ぜんぜん似てないけどねっ！顔とか、美醜とか・・・。そう言っ
て悲しくもないレベルに。

「あっそういえば今日から魔法学実技も取り入れるんだってね！」

「・・・実、技？」

「うん！でもみんなつかえるような簡単な奴だっって」

「簡単・・・簡単ってのに火とか当てる奴？」

「？うん！」

今はすごくその笑顔に冗談だよ！って言ってほしい。

「食べ終わった？」

「えっうん」

「じゃあもうそろそろだし、いこっか！」

「僕たちもいっしょにいくよ」

(どうしよういやだ、すんごいやだ。まだできないもん魔力の調節)

「あつ董ちゃんって何が一番得意？」

「えっなんの？」

「魔法、私は水が得意なんだ」

.....

な、なんだそれ得意とかあるの？

得意、得意血で魔道具作り？そういうんじゃないよな.....
のせるのも違うし.....たしか、火、水、風、地、雷、光、闇だっ
たけ

何か適当に.....

「えっと地？かな.....」

うんまああんまつかわないだろうし

「へえ！地なんだ！精霊との契約はしてるの？」

「えっうん」

まあ契約ってたしか「ほとんどの人が学校で学んでやっとできるっ
てかんじだ」っていつてたよな秋史さん。

「まさか、してるの？」

「うん、もともと加護もちでね」

「.....えっ」

「ロードとジンもだよ」

「うん僕は火だよ。ジンは二つもだよ光と闇」

えっ加護もちも確かけっこういやものすごく珍しいって。ロード学
校でも全学年でも20〜30人ぐらいだって。あれ？私なんかエリ

「トに囲まれてない？」

「・・・精霊つて見えてるの？」

「えっみんな見えてるよ？」

「み、んな？」

「まさか・・・」

「見えてないのって私だけ？」

「「「は？」」「」」

三人がかぶった。あの無言つらぬいてたサイメリアさんも喋ったぞ。というか・・・。

「いえよ！あつきー！！」

「だれっ！？」

「知り合い・・・」

なんであいつそんな大事なことを・・・。

「ほんとにみえてないの・・・？」

「ど、どこらへんに」

「僕たちの近くに見えない？」

なんも見えないし・・・っ！

「そうなんだ。珍しいね・・・でもだったら精霊の勉強のとき大変かも・・・」

「大変？」

「うん実際に精霊を交える授業があるから」

「ど、どうしよう」

「・・・まだ先だろ」

おお、サイメリアさん空気だったからびびったよ。

「うん、まだ先だしね!」

「その時に考えればいいよ!」

「そ、そうだよね!」

ま、さきだしね……。

あ、ついた教室。

「あれ、先輩たち違う教室じゃ」

「うん、今日は初めての実技だから一応僕たちが付くんだ。あと先輩じゃなくて名前がいいよ」

「俺もだ」

名前かぁ……なんだったけ仲いいとか関係なく私覚ええないんだよね。

ほんとになんだったっけファミリィネームならわかるんだけど……
まあ「あのー」とかでごまかしゃいいか。

そして

ああ、いやな実技が始まった。

もっやだ

「では、みなさん今日は実技を行います。近くの先輩方とペアを作ってください、その間、僕は各自見て回るので三十分後に発表を行います」

若くて優しい、整った容姿というありえねえだろっ！って言う生徒に人気なライツ先生です。今までかっこいい人結構あってたけどはつきりいつてすんごい好みです。声から何まで好みだよ。ということあの先生とは極力かわらないようにしますよ。近づいたら絶対緊張して真っ赤になるから。観賞はするけど。

「じゃありディアは見たことあるけど神山さんの見たことないしやってみよっか」

「えっ」

「的に中心は難しいから火、水、雷なんでもいいから試しにね」

「・・・笑わないでくださいね」

「大丈夫だろ簡単だし」

「簡単・・・」

スティックを取り出して。

「えっスティック？」

「突っ込まないでください」

魔力をうまく調整。

「火を的の中心に」

「ぼっ」

「・・・なんで、全体を燃やした」

「たったまたまよね董ちゃん!？」

「ははっやっば私に魔法なんか無理・・・」

「が、がんばればできるさ!」

私もうだめかもしんない。

「神山さんはすごいことになってますね」

「うわぁっ」

ちよっ後ろからでてくんなむしろちかずかないで。

「あせらないでがんばりましょうね」

笑顔かけー顔が赤くなりそうだよ、離れといてよかった。
よしっ!先生いったな。

「じゃあ私するね!」

的を狙う。

「ピッ
ピッ」

無独唱なうえに水があり得ない速さでの中心だけをつらぬいた。

「す、っ」

周りがざわついている。

「すごい」

「さすが天才ね」

「最年少で宮廷魔法団によばれたんだろ」

「歴代のあの人たちにも次ぐっていわれてるんだろ？」

近くの子がしゃべっている。

「相変わらずだな」

「ありがとう」

天才？すごい確かにサイメリアちゃんはすごい、見入るほど。
でもあの人は、なんといった？あっきーは時操ったらまあまあだな
って……。

あんの猫どんな嘘ついてんだっ！よくかんがえりゃあ時操るって上
級魔法だろ！絶対！あんの

「董ちゃん？」

・はっ

「あ、すごいね、中心つらぬいてる」

「？ありがとう……」

そして何度か練習をして（すべて失敗）。

「はいっ！みなさん順番に並んで一人づつ見せてください」

「もうやだ」

「大丈夫だよ！まだ時間もあるし練習していけば」
「だってー」

結果は散々だった。

みんな中心は数名だけだったけど的を壊したり燃やしたりはいなかったし。

ルドヘキアちゃんときは歓声が上がったし。

それに比べて私は周りから、嘲笑、苦笑い、同情、どれかだったし。

「次、体育だよっ飛ぶ授業！着替えよっ」

「んー」

体育かぁー・・・。

運動大つきらいなんだよなぁーまあ飛ぶは楽しそうだしね。

できるよねーたぶん・・・。

天才どもがつ！（前書き）

「私」に挿絵追加しました

ほかのにも挿絵つけるのでいやな方は読む前に挿絵機能をオフにしてください

天才もがっ！

「もう無理だ私」

「だ、だいじょうぶだよ！」

> i 2 7 1 2 7 — 3 4 9 2 <

だめだ。

飛ぼつとしたら落ちるしホウキから。

授業も意味が分かんない。

私こんなにできない子だったのか・・・。

ルドヘキアちゃん天才だし。

そして前にいる二人も天才らしいじゃないっすか！？女の子たちが騒いでましたよ！？くそっ！

「練習すればできるようになるよ」

「全くできないわけじゃないだろうっ？」

「ほほできませんけどね、はっ！」

「キャラかわってるよ」

かわりたくもなるわっ！

だってこれだけ平凡な子が注目浴びるほどの落ちこぼれだよ！？？

「なんか今日だけで自分がどれだけ落ちこぼれなのか分かった」

「大丈夫入学試験通ったんだし！」

「入学試験？・・・うけてないよ？」

「えっじゃあまさか推薦？」

推薦？ああ、たしかあつきーが推薦したとかそんなようなこと
言ってたな。

「うんたぶん知り合いがしてくれたんだと思う」

「その知り合いって？ロード学校に推薦書いて受理されるような人
でしょ？かなりの人だよ！」

えっそういえばあの人自信過剰発言してたな。

「そんなに？」

「うんこの学校には試験か推薦か学校がスカウトだもん」

「ちなみにルドヘキアちゃんは？」

「えっ今名前……」

「？あ、あつてなかった！？」

「いやあつてるけど……」

「？」

どしたんだ？

するとマクリーンさんが耳打ちしてきた。

「名前で呼んでほしかったんだよ」

「えっ？ああ！えっと」

思い出せ思い出せたしか。

「えっとリディアちゃん？」

「！」

顔がぱあっと輝いた。

「ちゃんもいらない！」

「えっとリディア？」

「うん！えと私も呼び捨てしていいかな・・・？」

「？いいよ」

なんだこのほのぼのした感じめっちゃ久しぶりだぞ。

「じゃじゃあはなしもどすね！」

さっきよりいくぶんテンションが上がった。

「えっと試験はそのまま入学の試験を合格して入ること、そしてスカウトは学校がさそって試験なしで入れるの」

「ちなみに三人は？」

「僕たちはスカウト」

だと思っただよ！

「そしてスカウトはすごく珍しいの、もし入る前にだれかに書いてもらっても学校がわが誰でもは受理しないの。だから学校側に信頼されている人。そして入学前からそんな人に推薦を書いてもらえるような人は少ないからすごく稀なの」

「えっ私稀なの？」

「うんそういうこと」

「で、誰なの？」

「えっ」

「推薦者。それなりの人にはまちがいないよね」

「いや・・・」

「で、だれだ？」

ちよっ三人してくんな!

というかこれは言っていていいの・・・?

さてどう乗り切ろう。

何か私かわいそうだな(前書き)

10/19ちょっと変えました。

何か私かわいそうだな

んーなんて言う関係だろう、そういえば……。親戚？友人？どっちみち知り合いなんだよな何言っても。

「えっと、外面が良くて、天才で、スパルタな猫じゃなくて人です」

「あの、全然分かんない」

「じゃあこの話はスルーの方向で」

「全然うまくごまかせてないぞ」

「私そんなうまくごまかすなんて高度なこと出来ないんで」

「まあ、とりあえずごまかしたいんだね」

「そうっす」

「じゃあ機会があつた話してよ」

「承知しました！」

「何キャラだ」

おっサイメリアさんがつつこんだぞ。

「あ、もうすぐじゃない？実戦」

「いくか？そろそろ」

あ、実戦の説明をすると上級生と合同で、何チーム（1チーム4〜5人で各担当の先生が決める）か作り、魔法とかいろいろつかって戦って自分のチームの旗を傷つけられたら負け簡単に説明するとこんな感じですよ。

「チームってこの4人一緒だったよね？それだけ？」

「あと1人来るって言ってたけど、たしか名前はレイス・カトックっていう人。同じ学年だったと思う」

「ふーん」

女の子？男の子？

「あのーすみません」

「えっと同じチームになったレイス・カトツクです！よろしくお願
いします！」

わーさわやか〜またイケメンだなもうなんか慣れた私の周りの美形
率の高さ！

周りだけ……。うん、目に優しいよ。

「よろしく僕はロド・マクリン。名前で構わないよ、よろしくね
カトツク君」

「あ、俺も皆さんレイスってよんでください」

と皆の自己紹介（やっと二人の名前分かったほら意外と聞き逃して
ねりディアが呼んだ時もぽけーっとしててね）がおわり開始の合図
が。

「皆さんぜひ最後まで残って下さい。では、実戦練習開始！」

はじまつちやっただーっ！

私たちは森の中で（実戦は森や校庭などの場所である）まあ話しあ
いを。

「じゃあ、旗はどうやって守る？」

「いつそ誰かがもって逃げるとか？」

「そしたら敵と会う確率も高くなるだろ」

「じゃあ」

あ、なんか議論交わしてるぞ、その間私はレイスと話を。

「なんかすごいね」

「おお、やっぱあの3人組が集まったからほかのチームも作戦考え
てたぞ」

「うわーめんどくせー」

「はつきり言うな」

「とりあえず私は動かなければそれで」

「実戦の意味ないだろ」

「いや私生粋のインドア派なんで日頃体育か書店以外動かないんだ
よ」

「動け」

「やだ」

「運動音痴」

「てめっ、みたことないだろ」

「いや、なんと「ちよっと、なにもりあがってんのよっ!」

「お前らも、参加しろ!」

ええーいきなりー。

「えーだって「だってじゃないよね?」

「えっとなんかもっ」

「「すみませんでした」」

なんか私レイスと仲良くなれそう。

「で、いまにはなしあってるんっすか?」

「旗をどうやって守るか」

「旗ね」

旗かゝ守る・・・んー。

「あー」

「?どしたのレイス」

?策が思いついたか?

「精霊に守ってもらえばいいんじゃないですか?」

> i 2 7 2 5 2 — 3 4 9 2 <

「「「あーー!」」」

こいつら忘れてたな(私もだがあっちみえてるじゃん)

「それいいな」

「じゃあ誰の精霊にする?レイスも契約してるでしょ?」

「うん俺は雷で確かロドさん、火、ジンさん、光、闇、リディア、水だよな?」

「うん」

なんか私かわいそう。

「あ、でも董精霊見えないんだよね?」

「見えないのか!?」

驚かれたよ。

「・・・うん、でも見れると思う、たぶん」

「たぶん？」

「うん、試してないけど」

たしかあつきーが言うには手を目にかざして

「みえ、た」

なんかものすごい美人さんがいるーーー！4人の周りに！

「魔法か」

「うん」

わーすげーでも私悲しいー（いや契約してるひと珍しんだけど）
こまで集まったらね）。

「じゃあこれで旗を守るのはきまったな、じゃああとはほかのチー
ムをつぶすぞ」

つぶすってジンさん怖いよ。

じゃあ私どうしよう運動神経ゼロだぜ

何か私かわいそうだな（後書き）

今回けっこうジン（サイメリアです）をしゃべらしてみました
あと新キャラです

わーめんどくせー

・・・何なんだこいつら。

レースおまえ地味にすごいとか反則だろ。

旗狙われる前にほかのチーム全部つぶしたぞこいつら。

「意外と簡単だったね〜」

笑顔が今は少し怖いよりディア。

そしてなぜだろうほかのチームから私が睨まれてるよ。

「でもレースお前強いな」

「ありがとうございますジンさん」

でも何だろうね私つつたただただけだけど。

「疲れたー」

「何もしてないだろ」

「精神的疲労はあなたたちの倍以上ある」

「大丈夫？」

「ぜんぜん」

これが週一のペースであるのか・・・やだな。

「おっとどけもーのでーす」

配達員の鳥です（ルルちゃん）しゃべります、切れたら火を吹くらしいです。

「だれに？」

「董ちゃ〜ん」

「私？」

だれだ？

「箱？」

持ってきたのはリボンのかかった箱まあ所謂プレゼントのいれものだ。

「中身は？」

「んーなかは、」

・かぼつ

・ぼすつ

「?どうした」

「・・・」

「なんか変なものでも入ってたのかい？」

「いますぐこれ返しましょう」

「えー!?どうしたの!？」

ついつとリディアたちに渡す。

「あーうん・・・」

「・・・まあ可愛いと思うよ」

「よかったじゃん人形」

レイスお前何にも分かってない。

「お前人形だぞ？ただの人形ならまだしもなんか呪いの人形っぽい雰囲気醸し出してらるだろっ!？」

「かんちがいだって可愛い人形じゃん」

「このっのんき男っ！」

「気にしすぎじゃない？」

「じゃない！お前以外は全員微妙な感じだろ!？」

ぬいぐるみならまだしも女の子の人形だぞ？しかも不気味な。ああ、夜な夜な髪が・・・ きゃー！

「これはねえ？」

「ちよつと・・・」

「いや明らかに」

> i 2 7 2 5 6 | 3 4 9 2 <

「大丈夫じゃね？」

「いやよく見てよ」

「げっやっかいな」

「えっちよっ何!？そこまで!？」

「んー言っつていいかな・・・」

「言わないほうがあれだろ」

「でも・・・」

ええー！気になるし！ちよつとそこまで、考えてなかったし・・・。

「えつとね、この人形から、ある魔法がかけてあるのと・・・」

あるって絶対呪いだろ

「あと、人形自体からも魔力がねえ・・・」

「うん人形って言うより、」

「人形にされたって言うほうが正しいな」

「はっ？」

「まあもとは人だな」

「かなり強い魔法使いだと思う」

「たぶん誰かに呪いで人形にされて、いつからかふつうの人形に勘違いされて呪いを届ける人形にされたんじゃないかな」

「だめだ、そんなこと私は聞いてない。突っ込んじゃだめだ、人形を見るな。」

「目をそらせ、私。」

「どんな呪いでしょうか」

「あいてに必ず不幸なことが起こる」

「あ、意外と普通」

「それにその程度なら俺でもとける」

「といてください」

「かせ」

「ありがとうございます」

「よっしゃ、めっちゃすんなりいったぞ。」

「でも人形どうしよう」

「もらっとけよ、プレゼントされたんだし」

「うーん」

「呪いは簡単だからとけたが、人形をまた人に戻すのは複雑だ、とけるが時間がかかるぞ」

「いや大丈夫ですよその手のは、得意そうな人を知ってるんで」

「得意？」

「ええ、まあうちの母なんです」

こっちに来て驚いたよ。

ロード学校は卒業式にそれぞれの属から一人ずつもつともすぐれてる生徒を選ぶんだけどその中でも伝説の時代つてのがあってその年の四人はケタ違いだったとか、その中の一人うちの母らしいっす、年はちがうがあっきーも選ばれてるらしい。

なんか私の周りすごいな、んで母は呪い関係強いつてあっきーが話してた。

「とけるのか？これが簡単に」

「たぶん」

あの母だ私なんか目が合うだけで呪われるぞ。

まあとくのも簡単だろう。地味な親ばかだしな。

「鏡つかえば渡せるだろうし」

「鏡つてまさか空間の鏡？」

「んー？名前分かんないけど連絡とかにつかってる」

「ものすんごいレア魔道具だぞ」

「あーまあの人ならたぶんそのぐらいの作れるんじゃない？」

「つくるっ！？誰だその人！？」

「兄みたいな人」

「ありえねえだいたい」

「連絡はいつするのかな」

「・・・」

「今日の夜ぐらいに」

「僕たちもいていい？」

「えっ!？」

「その人か？推薦人」

「んーまあ、でも連絡するっていつでも推薦人のほうじゃなきゃなくて母ですよ？」

「ああ、どうしよう董のお母様に挨拶を」

「どんな人かな？やっぱそれだけの魔法使いだし若いんだろっな」

「ちよつなにいる決定なんだよ」

「いいだろべつに減るもんじゃない」

「そういう問題じゃないでしょうっ！」

「よしっ決定」

なんなんだこの暴君たちは。

というか私も取りあえず隠してたけど……。

隠さなくてもいいよね！めんど……隠し事はいけないよ！

「すこしですよ？」

「「「「「はい」」」」」

変なところだけ声あわせやがって

あれ、何か大事？

「初めまして、董の母です。百合ってよんでね」

わーはつきり言って、身内の鼻屑目なしにかわいいうちの母だがそれが遠慮なく最高級スマイルつかってるんで四人とも頬染めてるよ。

「ちよっおまえの母さんめっちゃかわいいじゃん」

「はは」

レイスちよっと騒ぎすぎだろ。

リディアもそんな恋人の親と会うみたいな感じやめれ。

「あれ？ジン君じゃなくい！ひさしぶりねえ、お母さん元気ー？」

「お久しぶりです、百合さん」

おい、ちよっとまてやなんか聞き逃してはならない会話がされたよな。

「お母さん？」

「なあーに？」

「説明」

「なんのかしら？」

「知り合いつていうことをだまってたことだ」

「えー？聞かれなかったし？それに友達なんて聞いてなかったし」

「いえよ！」

「いいじゃないどうせ言ったところでかわないでしょ？」

でもなんかあれじゃん。

「ジンさんもきずいてたなら言えや！」

「いや、今きずいた」

「冷静だなっ！」

「じゃあ百合さんってあの魔法使いの一人ですか!？」

「あゝそう呼ばれてた時期もあつたわね、まあ衰えてない自信はあるわよ！」

「それならあんな呪い一発ですね！」

「…呪い？」

「はい、だれかは分かんないんですけど董に呪いをかけた人形を送ってきたんです」

「ふゝん呪いねえ……ふっ董に呪いですって？私の娘に？私への侮辱かしら！」

「あつちよつお母さん、妄想、勘違い、阿呆。」

あれ、部屋が暗いじゃなくて、黒い……おかしいな鏡越しなのになんでだろう。

「リディアちゃん、人形かしてくれる？」

「あ、はい」

「あら？呪いはといたみたいね」

「それはジンが」

「ありがとうねジン君、で、董は雷、火、水、風どれがいい？」

「えっ？」

雷、火、水、風？どういう意味

「……うえいいいっ！何やるうとしてんのよ！」

「なにつて呪いしてほしくて連絡したんでしょ？相手のいたぶりかたは雷、火、水、風どれ？闇でもいいけどちよつとやりすぎちゃう

かも」

「ノー！ちがうちがうその人形の呪いといてほしくて連絡したの！」
「あらぁ・・・そっち？」

あらぁって。

そうしてると、かすかに光る。

「はい」

「えっなんもかわってないじゃん」

「しゃべりかけて」

「いやそれは、恥ずかしい」

「・・・」

「すみません」

にらまれたぞ怖いな。

「えっとなんて話しかければ」

「あらっテレビ始まっちゃっ、きるわよ」

「えっちよっまっ」

「・・・」

「ほんとにきんな阿呆ー！」

（ ）（ ）（ ）すんごい家族だな・・・（ ）（ ）（ ）

「董ー」

「ああ？」

「ああ？っておまえ」

「いや久しぶりにお母さんと話してたら調子が狂った」

「まあそれは置いて人形どうなった？」
「ああ、話しかけなきゃ」

何言えばいいんだ？

「えっとすいませーん」

.....

「かわんねえじゃん」

「でも百合さんが失敗はないと思うけど・・・」

「話しかける言葉が悪かったんじゃない？」

「でも普通だったぞ」

「なに？」

「うわぁっ!!」

「おっしやべった」

「すごいなあ、やっぱりかなりの魔力だな・・・」

「何でこんな呪いにかかったのか不思議なくらい・・・」

「しかしこの呪いを百合さん無独唱か」

何でみんな冷静なんだレイスは驚いてそして腰抜かすぐらいのへたれを期待してたのに。

私だけ叫んで恥ずかしいな。

「初めまして、フィリアよ」

「はじめまして・・・神山董です、董ってよんでください」

と、全員自己紹介を終えまして。

「とりあえずこの呪いをといてくれてありがとうございます」

「あ、いえいえ私じゃなくて母がといたし」

「頼んでくれたのはあなたでしょ？充分感謝に値するわ」

なんか見た目と反して大人っぽいな。

「あの〜フィリアさんって見たところかなり強いですね？」

「まあそれなりに」

「なんでこんな呪いに」

「いろいろとあったのよ」

「いろいろ？」

「まあ私宮廷魔術師でねすこし油断してて呪いにかかっちゃって」

「じゃあ、フィリアさんは、あの」

「あら、よくわかったわね董以外」

「じゃあその董さんに分かるように説明を」

「元宮廷魔術師団、副団長なのよ」

「とりあえず私の周りはずごい人しか集まらないってことですね」

「ぜんぜんちがうけどそのようね」

「私最近普通の人が恋しいですよ。美形とか大好きだけど、多すぎはもう毒だ。」

「なに急に相談してんのよ」

「しかも落ちこぼれだし」

「まあこれ送った相手は好意から董に送ったみたいだけど？」

「ええ！本当に！？春！？桃色来ちゃいました！？」

「・・・」

「失礼しましたー！すんません！」

え、本当に送ってきたの誰だろう・・・。
好意持つてる人には好意を持つ理論がいま証明されました。

「あ、そう言えばフィリアさんってなんで人に戻らないんですか？」
「なんとなく」

「意外とこの姿が気に入ってるのか」

「あら、鋭いわねレイス」

「気に言ってるのかよ！」

「そういえばフィリアさんは私たちの部屋でいいですよね？」

「ええ、おじゃまするわ」

「いえいえ」

リディアとフィリアさん話進んでんな。

「宮廷は別に連絡いつでも良いですよね」

「まあいまさらちよつとぐらい待ってくれるでしょ」

あれ、いいのかそれで。

なんかまた一人ふえて濃くなったな楽しそうだしいつか！
なんか私変ポジティブ。

ザクロ石

「はよ じざいます」

「あら、おはよう」

フィリアさんはやっぱり私がもらったんで私の部屋にいます。
ベッドなどは血で作りました、便利。

「ねーむーいー」

ブローチを付けながら唸る。

「ちよつと寝ぐせすごいわよ えっ！」

「?そんな驚かなくても」

目を見開いて口をあけている。

> i 2 7 6 2 5 | 3 4 9 2 <

「そ、そのブローチ！」

「ああ、もらったんです知り合いに」

「と、時田秋史と知り合いなの!？」

「まあ、いろいろとあってそんなすごい人なんですか？」

すごい人なのは分かるがあまりどのくらいとかがわからない。

「す、すごいなんてもんじゃ・・・」

「そんなに」

フィリアさんが驚くくらいか？だから隠せって言ったのか。

「その石・・・まさか実物を見れるなんて
石？」

このザクロ石みたいな石だろうか。
それが何かあるのか？

(・・・)

「まさかっ宝石かなんかなんですか!？」

え、ほんものなの!？

「・・・それが何か知らないのね、まあ宝石なんか目じゃないわよ
え、ちよっ気になる。」

「返す!返そうそんな高価なものもらえない!」

「返す!？ブローチそれを!？」

「だって不気味じゃないですか!そんな高価なものいきなりもらっ
て!」

「知り合いでしょ?」

「それでもなんか!」

よし今日の夜返そう。

しかしこの石にそんな価値が・・・全然わからん。

「董?いごー」

「あ、うん」

「あ、フィリアさんはこの中に」

フィリアさんは授業中は四角い箱をチェーンにとうしてネックレスにしたものに入れてる。

四角い箱は中が部屋のようになっている。

箱は大きくも小さくもなるが中の部屋は変わらない魔道具を血で作った。一応部屋は私の想像でセンスはまあまあだしくつろぎやすしかし、私が持ってきた本や漫画も部屋に入れたし、私の許可なしでいじったりできないようにしたので安全で、いい部屋になってると思う。

「あ、今日魔法学だ」

「・・・神山さん？」

「・・・すみません」

なんでだ！なんで全部もえんの！

はい、私は的で合格もらってないんで先進めないんですよ、私だけ！しかもライツ先生つきつきり！ああ、いいけどやだ！いや？じゃなくともうなんかにやつきそつって言うか、もう見るだけがいいんだここまで好みだと。

「もう一回してみましようか、ちゃんと魔力の調節を」
「・・・はい」

はい、全部燃えた！。

「この調子だと放課後補習ですね」

「えっ」

「先に進めませんか」

「やだ、授業中だけでいっぱいなのに補習とか。なんか方法は……。」

（私は魔力が多すぎるからちょっとつって言うのが苦手だからなくもうちよつと魔力多く使ったたらそれなりにできるんだけど）

ほかには声、血、武術　　やくたたねえー長距離的にどれもつかえねえー。

「はい、もう一回」

「やあーだあー」

「……ドンマイ」

「わーいらつとくるー」

レイスその　　いらないだろ、うざい。

『補習決定です』

その言葉をライツ先生が言った時はほんともう無理だと思ったよね。

できない理由に（屁理屈）あなたがいて緊張してできないも含まれてんですよ。

ザクロ石（後書き）

堇は、魔力を少しだけ使うのが苦手で魔力を使うときはもうばばんと使うほうが得意です

血を使うのは1滴など調節がしやすいし道具などのほうが使いやすいからです

・・・決闘？（前書き）

挿絵があります。嫌な方は挿絵機能をオフに

・・・決闘？

「ちゃんと集中してます？」

「・・・はい」

はい、補習中です。

集中・・・はつきり言えば先生いないほうが集中できるですけどね。だってもる理想なんだよ！しかも普段着なんですよ！いつもの服着るよ、かつこいい。

私とかちゃんとローブも着てるのに。

「魔力があり過ぎるのも大変ですね」

「はあ」

あ、魔力は普通相手に分かんないそうです。学校側は生徒の魔力把握してます。

「じゃあ、次は、「失礼します！」え」

急に女の子が入ってきて、険しい表情で私のほうに来る。

「神山董さん」

「は、はい」

「あなたに決闘を申し込むわ」
「え」

> i 2 7 7 3 0 | 3 4 9 2 <

・・・決闘？戦うやつ？そんなんあんのかこの学校。

某執事少女漫画を思い出したよって違う違うそんなことじゃなく。

今誰に申し込んだ！

「私が勝つたら私に力を貸してほしいの」

「話が見えませんか」

「ええ、力を」

茶髪巻き髪お姉さん系気が強そう美人さんは話がかみ合わないよ。

「・・・力ってどんなですか？」

「もちろん、私が負けたらあなたの願いを何でも聞くわ」

(・・・話を通じない場合はどうすればいい)

それに、願い？ 願い・・・私も無欲じゃないんでまあ、かなえてもらえるならあるんだよ。

あるんだよ、一つリディアたちには頼みにくかったからな。

「やりません、無理です、すみません」

「ほんとにつ！」

「はい(嫌な予感がする)」

「ありがとう、受けてくれるのね！ じゃあいつか希望はある？」

「話聞いてます？」

「じゃあ明後日の昼大丈夫？」

「どうしよう、私このタイプ無理かも知んない・・・」

誰にでもなく喋る。

「無理？ ごめんなさい、急いでて・・・」

「そっちじゃありません・・・」

「ああ、明日してくれるの？うれしいわ！」

「フィリアさん助けてー、今のテンションじゃ私対応しきれないよー」

「あ、助っ人呼ぶのかしら」

「話だけじゃなく、意味も聞き取って下さい」

「じゃあ、これにサインを」

「いやです、お断りします」

決闘って楽しそうだけど、好奇心が燃えてるけど！
それとこれとは別もんです。

「はい、これペンね」

「いや、ちよっ」

「ここにね」

「・・・はい」

私にとってサインかこのキャラを相手いするか、私は迷いなくサインを選ぼう。

このキャラ昼とかだったら相手できそうだけど、放課後はきつつい。サインをするほどに。

「じゃあ明日ね！ばいばい！」

「本当にさようなら！」

なんかすごい子だな。

「神山さん」

「は、はい」

「がんばってくださいね」

「あ、はい」

「彼女なかなか優秀ですが」

「え、ちよつと、え？本当ですか」

「はい」

あれ、なんか後悔。

・・・決闘？（後書き）

ライツ先生片目めんどかったんです・・・

10/3かなり書き直しました。

余計気になる

「これ返します」

秋史さんは首をかしげた。

「なんで？」

「だってこの石……」

「！きずいたのか？」

「はい……（やっぱなんかすごいものか）」

「いつから？（だれかが、こいつに？それとも）」

「今日の朝です」

「そうか（ああ、めんどくさいことになりそうだな）」

「で、何の石なんですか？」

「え？」

「だから何の石なんですか？だって宝石よりすごいってフィリアさん言っていましたもん」

「あゝそう、きずいてない感じ」

「？」

「そっか……無駄に気負いしちゃったし」

なにがだ？

「返します」

「いやだ」

「は？やですよ返します」

「だめだ、返品不可」

「はあ？なんか怖いじゃないですかあつたばかりの人にこんなもらうって」

「おまつあったばかりってひどっ！妹みたいに可愛がってやったのに！」

「いや、まあたしかに兄みたいに思ってますけど・・・」

私ももらったの返すのは気が引けるけど。

宝石とか珍しいものだったら話は別だ。

「じゃあ、もつとけ」

「え〜こわっ」

「じゃあ俺の言うこと一つ聞いてもらっから」
「返します」

「いいだろ別に、簡単だぞ」

「んー」

「それにその石値段とか付いてないし（まあ幾らでも出すって言うやつはいるだろうけど）」

「・・・そうですか？」

「んーまあ」

「それにお前が言う石は真ん中だけで、下二つは、魔晶石だし」

「・・・」

「だから返すなよ」

「私の知ってる限り、魔晶石の値段はかなりののですが」

「安いだろ、じゃあ俺の言うこと聞けよ、一つ必ず」

「金持ちがっ！」

「まあ呪いの人形とか送り付けられたりどっかいくときは必ず言え」

「・・・ストーカー？（なんでしてんだ）」

「違うからな、噂だよ」

「？」

なんだ？まあいいか。

「とうるか過保護なお兄ちゃんか」

「ま、言うことあるだろ？」

「?・・・!さ、さあ?」

「あれ俺の知る限り決闘を受けてるらしいけど」

「(腹黒がつ!) ああゝまあ・・・」

「・・・的当てもできないくせに」

「うっさいっ! 難しいんだよあれ!」

「簡単だろ」

「腹黒天才がつ!」

ここまで来て何で私がチートじゃないんだろっか。

余計気になる(後書き)

チート・・・になる予定なんだけどな・・・

10/3書き直しました

・・・中継

決闘、今日か・・・。

「董！何で教えてくれなかったの、決闘！」

「え、ああ急だったし受けるつもりなかったのに、話しかみ合わないというストレスたまる仕打ちを受けてちよっと・・・」

「？噂すごいよ、全学年伝わってるし」

「今年初だからな」

「そんなに」

「ギヤラリーとかいちゃったりするんですか？」

「うん結構来るよ、僕たちの時は中継あつたし」

「は？」

「号外も出たな」

「え」

なんなんだこいつら。

「ロドさんたちは何かけたんですか？」

「んー？実戦のチームに行くつてのとか」

「そんなこともかけるんですか」

「あ、あれつてほんとなんすか、相手が勝つたら恋人になるつて賭け」

「ああ、あるよ、ダンパの相手になるとかもあつたし」

「え、じゃあジンさんたちに学校の女子が毎日決闘挑んだつて伝説」

「ああーダンパの時期とかにね」

「すっげー！」

どんだけだ。

「あれ、でもジンさんとロドさんですよ？相手女の子でそんなに挑んできたんですか？」

「ああ、代わりがきくんだよ」

「代わり？」

「相手が自分より強いと思ったら、代わりになる人さえ許可したら誰でも代わりにはいいんだよ」

「へ〜」

そう言えば茶髪巻き毛お姉さん系気が強そう美人さんが助っ人とか言ってたかも……。

そして茶髪巻き毛おね……巻き毛さんの名前なんだろう。

「しかし、大丈夫なのか？補習の合格もまだだろ？」

「大丈夫です、たぶん」

「たぶんなんだね」

「あ、董は何かけたの？」

「んー秘密です」

話がかみ合わなくてもどうせなら勝ってお願いをきいてもらいたい。

「？」

「あ、そろそろだ」

いかないとな〜はあー優秀かあ〜。

「私、応援するからねっ！」

「ありがとリディア」

「僕たちは周りで見とくね、がんばって」

「ありがとうございます」

・・・中継（後書き）

めぞすはあと一話更新

10/3少し書き直しました

決闘！（前書き）

軽い戦闘（魔法）シーンがあります。
私の文才がないので、しょぼいですが。

決闘！

きました、ついに。

やばい、ギャラリーすごい緊張する。

「では、ルールを説明します」

こんな感じですよ。

- ・相手の校章（魔材でできた）を壊したほうの勝ち。
- ・ギブアップ、再起不能、審判の判定、の場合の勝敗もある。
- ・なんでもあり。

あ、ちなみに危険と判断した場合は審判がとめます。

「では、はじめ！」

「風よ私の指示のもとに動け」

「っ
っ」

風が肌を切り込む。

浅い切り傷ができる。

（いって、浅いのって地味に痛いんだよっ！）

相手が目の前から消える。

（どっど）

「董ー！」

目の前に手が来る。

・どんっ！

相手の風で結界にたたきつけられる。

「ったー」

「ギブアップしてもいいのよ」

「遠慮します」

「そう」

「っな」

手に何かをつかみそのままふりかざす。
とっさに横に体をそらすとローブが切れる。

（風の剣かつ！）

「えっちょそんなんなしだろ！」

「あり、よっ！」

しゃべりながらも切りつける。

必死によけるが何度かローブにあたり切り込みが走る。

「あなたもなんかしなさい、よっ！」

「なんかかって、わっ！」

「董がんばってー！」

「なんか攻撃しろ！」

「わかって、る！」

「そろそろ本気出すわよ」
「なっ!っ」

腕が切れ血が腕を伝い、服に染み込む。

(やばいな、でも女の子を殴るのは私のポリシーに反するし、歌は恥ずかしいあとは、血・・・使いたいがあまり使うとアッキーにくぎ刺されたし、あとは・・・)

スティックを取り出す。

ギャラリーが

「スティックかよっ!」

「まさかの!？」

とか言ってるが気にしない。

「あら、やっと魔法使う気になったかし、ら!」

「はい、なりました、よ!」

「ふふ、どんな魔法をするのかしら」

「水よ矢となれ」

水が矢になり降り注ぐ。

「風よ我を守れ」

風の結界をまとう。

(よっしやっ)

「蔓よ巻きつけ」

「なっ」

蔓が床を貫き、風の結界に巻きついた。

「くっ」

蔓が風の結界を押さえつける。

（風の結界を消せば）

結界が割れ、蔓も戻っていく。

「さ、邪魔はなくなりましたし」

笑いながら近ずいていく。

靴の音がやけに響いて聞こえる。

「風よ！」

「結界」

結界で風は髪を揺らす程度で終わる。

> i 2 8 0 4 1 | 3 4 9 2 <

「さあ校章を」

（まけるっ！）

「割らせて

（?こない）

視界に濃い茶色の猫が横切った。
ぱっとギャラリーを見る。

(あれ、秋史さん!?)

・ばきっ

「」「」「あ」「」「」

「え、」

「勝者アミー・メイスティー!」

「……ええーちよつまっ今は」

「やったー!私の勝ちね!力貸してもらっわよ!」

「まーじーでー!?!」

うそ、なんで、私勝つ感じだったじゃん、これも全部。

(あんのくそ猫ーー!)

「董……」

「ばかだな」

「言ったらだめだよ」

「何であそこでよそ見をするんだ……」

その少女が「なにか」に対してかすかに震えるのを、気づく者はいなかった。

決闘！（後書き）

どっちかたせようか迷ったんですけどアミーちゃんにしました
挿絵、マウスで描いたから微妙な感じに・・・

くそ猫っ！（前書き）

11話、「私」の話を少し変えました、まだですが後々の話に少し
かわってきますので出来れば見てやってください

なんとユニークアクセス数が1000いきました！

本当にありがとうございます！これからもお願いします！

くそ猫っ！

「てめえ！そのくそ猫！何でいんだよっ！」

「仕事だ、仕事」

「いえよっ！んで見にくんな！」

くそ猫があ！私めっちゃ勝つみたいなの雰囲気だしてかっこつけたの
にっ！

「えへ」

「きもい、22が何言ってるんだ」

「ひどいっ！」

何キャラだ。

「チッお前さえ来なきゃ勝てたのに、このナルシ男が」
「機嫌悪いな」

「ねがいごとがあ〜」

せつかく補習から逃れられると思ったのにっ！

「何かなえてもらおうとしたんだ？」

「・・・っ」

「?なんて？」

「意思の疎通を・・・」

「・・・」

おおおおおー！綺麗に雰囲気が変わったぞ。

あれ、これまさかそんなに？え、そんなにっ！?寒い寒いほんとに

氷ってるって！

「あれ？それは禁止だって言ったよね？」

敬語、敬語っ！敬語になってるって！

「え、いや、えっとあの」

「いつからきずいたのかな？できるって」

「いや、あの」

「いつ」

「すみませんっしたー！こっちきてちょっと経ってからです！」

「なぜ言わなかった？」

「え、あの機会がなかったといいますが、そのー」

「・・・この馬鹿が」

「すみませんでしたー！」

こわいこわいやばいやばい無理っ！

「何で分かった」

「えっと・・・人形に、触れてそしたら、視界がかわって」

いきなり視線が変わった、いつもより低くて周りが大きく見えた。驚いて、いやっ！って思ったら戻った。実際はギャーとかだけど。

「それで」

「人形の中に入ったって思ってコントロールできないかなって思っ
て」

「・・・まさか・・・できたのか？」

「練習したら」

「それはすべて意識が入るものの中に？」

「うん、相手にも入って、自分の中にもちゃんという、でもすべ
てを共有だったら触れてないとできなかつた」
「そう、か」

「なんかあつきー雰囲気変わったぞ？なんか考え込んでるみたいな
。。。」

「チツ、とりあえずそれは、はっきり言って普通じゃないんだ」
「普通じゃない？」

「それをできるのは、極稀なうえに独学でそこまでいくのは、お前
ぐらいだ」

「え」

「いや、学んでもそこまでできない」

「。。。」

「しかもさっきの言い方だとすべてじゃなかつたら離れてもいける
のか？」

「全部じゃなかつたら。。。でき、た」

「俺がしってるのは、稀にいるが意識してできるのは、少数、それ
にそこまでできたのならたぶんお前ぐらいだろう」

「。。。」

「。。。。」

「まさかのここで私チート！？うっそ、ほんとに！？ええーこ
れ喜ぶべき！？なんか考えるべき！？」

「。。。。ああそつだよそんな奴だよおまえは」

「なんか秋史さんやさぐれてるがまあいいや。」

「私なんかすごくない！？」

まああんま使わなそうだが。

「とういかお前何する気だったんだ？」

「え、感覚共有して魔力の調節とかの感覚を分かって補習をでよう！みたいなね」

「友達に頼めよ」

「なんとなく頼めなくて」

「ふん」

（一応は隠してたのか）

私じつは、すごいんじゃない？

「あ、これからここにいるから」

「へー……っではあ！？」

「理事長とその話してたんだよ」

「なんで!？」

「仕事だ」

「はあ!？」

「一応今年から講師になったんだよ俺」

これが？先生……ちよつと似合うな。
じゃないっ。

「入学式いなかったのに!？」

「ああ、ちよつと色々とあつて遅れたんだおれだけ」

「遅れた……」

「ああ」

「いえよっ!」

「お前馬鹿か？いつたら面白くないだろ？」

「しらねえよ！お前が馬鹿か!」

これは、私に対してのいじめかっ！信じられない、ありえないとい
うかもついでだ。

くっそ、かつこいいなこのやろっつ！（前書き）

小説のリクエストや挿絵をいれてほしい場面などあったらぜひ！コメントやメッセージから申してください！へたくそですが精一杯書かせてもらいますので、気軽にリクエストをむしろして下さい！絵のほうもします！

「くそ猫っ！」の内容を変えました、かなり変わってくるのでできれば読んでいただきたいです。

くっそ、かっこいいなこのやうじっ！

・・・眠い。

「ほら、おきなさーい」

「うーーー」

「あんた、寝起き悪いわね」

「あーーー」

「言葉を発してくれない？」

「おーはよーごーざいーますー」

「おはよう」

「眠いですね」

「何時間寝る気よ」

「あ~~~~」

きがえなきゃな〜。

ブローチと、ネックレスは・・・。

「フィリアさん、はい」

床に投げる。

・ボンッ

空中でおおきくなり出入りできる大きさになる。

煙みたいなのは普通出てこないでいいんだが魔法っぽいので道具出すときは必ずつけます。

まあけむりうごいけどね！室内でやると目の前見えないけどね！

「ずっと思ってたんだけどここまで大きくしなくていいのよ？人が出入りするでかさじゃない」

リディアさんは見た目人形です。

「はぁリディアさん、何言ってるんです、五センチぐらいの箱が二十センチぐらいに代わってもしょぼいじゃないですかっ！」

「しょぼいと思うけど貴女馬鹿じゃない？」

「そんなまじめな突込みって結構心に来るね。夢見る少女です。」

はっどうせファンタジーだいすきっ子だよ。

「董ー？いくよー」

「あ、うん」

ネクツレスをつけてブローチをロープの裏に付ける。

「おはよう」

「おはよう」

「はよー」

「おはようございます」

「おはよう」

はあ〜きょう昼休みにアミーさんに呼ばれてるんだよな〜。

「みなさんおはようございます」

「ん、理事長今日も若いな」

あ、じつはこの声いつも理事長でした美人な男の人です、おきまりですねここまで来ると。

年は3桁いつてます、おじさ、おっと長寿命ですね。

「ある事情で遅れてきましたが今年から講師できた」

・きやあー！

あれ、ざわついたぞ黄色い声援とともに。

来るぞあいつが、私の心はぎやあー！ってなってるぞ 帰りたい

「時田秋史先生です」

「今日から、よろしくお願いします」

・きやああー！

(ぎやあー！)

「かつこいいい」

「もう、早く授業したい」

「楽しみ」

な、あいつ、スーツだ、と・・・。

私がスーツフェチと知ってかこの野郎っ！

かつこいいいな！性格知らなければあの倍以上かつこよく見えたのに
つくそっ！

「今年からはちゃんとした講師なんだね」

くっぞ、かつこいいなこのやろつっ！(後書き)

董が使う魔道具たちです

> i 2 8 3 6 0 — 3 4 0 2 <

7 / 3 1 結構内容変えました

ばっごぁーん！（前書き）

「くそ猫！」「くっそ、かっこいいなこのやろっ！」を結構変えま
した

できれば見てください

ばっごおーん！

昼休み、私は今、優雅にお茶をしながら「あ、いたっ！」

「神山さん！」

「……」

ゆっくりとお茶をしながら「何、無視してんのよ」

・ばっごおーん！

> i28581—3492<

「え、ちよおま、いまなにしゃがった、ごらあっ！？優雅にお茶をしているこの私にっ！この私に！？もはや殴った音じゃなかったぞ！？無礼なッ！」

「よしじゃあ私の部屋にいこうか」

「えっノータッチ！？まさかのスルー！？スルーなの！？」

私になんか変な痛い人みたいじゃないか！

（だつてさ、猫がくるしさ、現実逃避したくてさ、だいたい元といえあの猫が来るのがいけないんじゃないじゃん！だつて私勝つ感じだったもん、秋史さんも言ってくれれば　　）

「ここよ」

「え、はい失礼します……」

へーローズ寮初めてきたけどあんま変わんないな。

ベルエトワールは、黄色がちよくちよく入ってるけど、こっちは薔薇色がいってるんだな！。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

(なんか緊張するな)

「で、さっそく本題に入っていていいかしら？」

「え、はい」

「まあ呪いの人形を拾っちゃったの」

「え、」

「この呪いの人形が簡単に不幸がおこるってやつなんだけど」

「はあ」

「だんだんひどくなってくるんだけど、最近じゃ物が落ちてきたりとかで危ないからとこうと思っただけ、でもかけた人が強力にかけたみたいで私じゃ魔力が足りないの」

「で、私に？」

「そういうこと」

「・・・なんで魔力わかんのか！？」

「まあ、じつは私あるところが特化してて、それが目なの」

「目？」

「一般的には真実の目って言われてるわ、偽りなく真実を見れる目なの」

「何でも見れるんですか？」

「見るものだったらね」

「珍しいん、ですよね、」

「まあね、でも私はそこまで強くないから、たとえば人がかくれるでしょ」

「はい」

「私にはどこに隠れてるか見えるの」

「すげー！」

(かくれんぼの鬼になったら最強やん)

「でも広範囲は、私の場合見れない」

「はあ、個人差があるんですね」

「ええ、それに強い魔法師は目眩ませの魔術を見せれば真実の目さえ欺けるって言うわ」

「へえー」

「私の従兄にねすごく強い真実の目の持ち主がいるんだけど、その人は真実の目の力がつよすぎて魔法では相手が上回ってるのに相手のすべてが見られるっていうわ、たぶん一番強いんじゃないかしら欺けるものがないっていつて噂だし」

(またか、周りは王道パターン)

「それで、あなたがこの学校一魔力の質、量の持ち主だってわかって決闘を頼んだわけ」

「そんな、経緯が・・・」

(あれ?でも・・・)

「私、呪いとけるかわかりませんよ?」

「あなたには、ただ魔力を流してほしいの」

「それでどうするんですか?」

「その魔力を私が呪いをとく独唱にあわせて貴女の魔力を使つてとく」

「はあくすごいですねなんか」

(優秀だなこりゃ)

「あ、量的にはあなたに負担は、ないと思つわ」

「・・・思つ?」

「ええ」

「たぶんかよっ!」

「大丈夫よ、あつても倒れるくらいよ」

「じゃねえよっ!充分だよ!?!倒れるって」

「だいじょーぶ」

「えええ!?!」

なんだこの人!?

最強コンビ！

「もうすぐだ・・・もうすぐで、あれが」

男は狂喜的な笑みを浮かべながら写真を見る。

「あの石が、手に入るっ！」

写真の中に映るのは黒髪の異世界の少女。

「やっと、やっと」

もう一枚には妖しく光るザクロ石に似た石。

「賢者の石がっ！」

「・・・」

「はいでは、この問題を誰か」

「はいっ！私が！」

「いえ、私が！」

「お、俺が！」

（ちょ、男もはいつとる！？）

「すっごいね」

「うん、ほんとに有名人なんだ」

「あ、そっか董こつちには任んでなかったもんね」

「うん、だからなんというか実感って言うかわかんないって言うか・

「・・・(街言っても猫に化けてたからわかんなかったし)」「
「いろんな伝説があるんだよ、ねえレイス」
「・・・」
「あゝもうまじかつけ」

誰だこの顔がだらしなく緩んでるやつは、きもちわるい。

「・・・レイスキモい」

「レイスうざい」

「レイス髪型変」

「レイス今すぐ変な噂流れる」

「えっ！？そんなに！？ひどっ！そしてもう最後とか何！？地味に傷つく！！」

「事実」

「・・・いじけるぞ?」

「やめてよ、うざい」

「いじけるなら一人の時にやりなさい」

「俺、くじけてもいいかな?」

どんまいレイス、でもお前はすごいいじりたくなるんだ

「董今失礼なこと考えたろ」

「まさか」

しかし、思ってたよりこの授業やばいぞ。

まさかの秋史さんとライツ先生のこの絶妙なっ・・・!

その、あれなんだよ秋史さん私が出会ってきた人の中で一番の美形だし、ライツ先生はもうっ・・・!ありえんほど理想なんだよ!緩くウェーブのかかった髪に、たれ目、そして腹黒って言う!っもう声も最高っ!その二人掛けで授業ってもうっ!最高なんだよっ!な

んか最強コンビだよな！

「うーんじゃあ、そこで楽しそうにしゃべってる、神山」

「え、」

「先生、俺も喋ってたんでぜひ俺がっ！」

ナイス、レイス！

あ、なんか寒いギャグみたいになった。

「却下、神山」

あいつっ！絶対わざとだろ！顔にやけてんだよ！何でにやけ顔も、かっこいいんだよっ、私なんてきもいって言われんのがおちなのによっ理不尽だ！

「はい、精霊の契約時に唱える独唱は？」

「えっと・・・（なんだったっけ！？）」

「懂」

リディアが耳打ちをし、ちらつと横を見る。

「えっと、我がんー」

「ちょっと何してんのよレイス！」

「ふん！自分だけ指名されやがってっ！」

「んーんー！（話してっ！）」

「はあー！？どんな嫉妬だそれっ！」

「はっ！自分で考えとけっ！」

「チッおまえっ！」

「神山」

「はいっ」

「答えは？」

わーかーんーなーいー。

全然頭の中かすりもしないっ！

(はっ！最終兵器があるじゃないか！)

「分かりません！」

周りから笑いが聞こえるが気にしない！

これならちよつと小言いわれて次の奴ーみたいな感じだろ！

「・・・神山」

「はい！」

「放課後俺のところまでこい」

「はいっ・・・は!?!」

「何がどうだと分かりませんだ！」

「・・・」

「じゃあこの問題カトツク」

「はいっ！えつと『我が名レイス・カトツクのもとこの者と使い魔の契りを結ぶ』です！」

「正解だ、そしてこの独唱のもと」

・・・意外と簡単だったな。

「やった当てられちゃった！」

お前は乙女か。

「いや〜がんばれよ?」

「ごめんね董・・・」

「いや、リディアは全然悪くないよ、悪いのはレイスだから」
「よかった、悪いのはレイスだよね！」
「だよね！ねえ？レイス」

私は思いっきり睨む。

「え、いや〜ね？まああれだよ、あれ！」

「お前、呪いの人形送ってやろうか？」

「こわっ！」

あれ、放課後予定あり過ぎじゃない！補習、呼び出し、呪い……。どれもやだっ！

最強コンビー！（後書き）

感想やコメント待っています！

実戦・・・そんなんあつたな

「あれ董？何してるの？」

「あ、ロドさん」

（？体育だったのかな？ジャージ着てるし）

「遅れない？制服だけど」

「？なにに？」

「？今日は実戦だよ？」

「は？いまなんていいました？」

「だから、今日は実戦だよって」

「またまた、ロド先輩何いつちやってるんですか」

「はは、前から一週間たつたじゃない」

「・・・まじで？」

「やっと敬語が抜けたね〜ちなみに集合時間十分前」

「・・・急ぎましようか」

今日私死ぬかも知らない。

「・・・なぜ制服？」

「着替える時間なかったんだよっ！」

なぜこんなに無駄に広い！

制服で実戦って！ものすごいじろじろ見られたし。

「は〜もうやだ!」

「どしたの〜董?」

「聞いてくれる、リディア!? 補習、呼び出し、アミー全部大変なのが、今日あるんだよっ!」

「あ、そういえばアミーちゃんの賭けの内容ってなんだったの?」

「あ〜まあ、ちょっと・・・ね」

「?」

『秘密にしてくれないかしら?』って言われたんだよね〜。

「ん〜まあちよつと今日は鬱憤晴らしに頑張ろうかな!」

「え! めんどくさがりで、一歩動くのもだるそうな、運動神経ゼロのお前がっ!?!」

「リディア〜ちよつと私準備運動してくるね〜」

「うん、がんばってね!」

「あれ〜なんか怖くない? あれ、俺やばくない?」

「よし、レイスちよつとあっち逝こうか」

「ちよつ! 字が違うって! 変換ミス! 変換ちがうって!」

「ふふ、大丈夫、あってるから」

「く、くるなっ! ぎゃー!」

「

その時、断末魔が上がった。

「ふ〜久しぶりの運動になった!」

「おつかれ〜」

「ロド、誰だあれは」

「うーん、ストレス発散中の董には近づかないほうがいいね」

よっし! 今日は一応旗をもらいに動くか。

実戦・・・そんなあったな（後書き）

短くてすみません・・・

感想やコメントお待ちしております！

ストレス発散って大事だよね！

「旗ください」

「は、はい……」

ふー絶賛ストレス発散中です！
旗もみんなからもらったしね！
もらったんだよ、決して攻撃しかけてきた相手を叩きのめして、齧
してとつたんじゃないよ。

「……何だそれは」

「？旗ですよ」

「そうじゃない、その数はなんだっ！」

「ああ、なんかみなさん下さいって言ったらくれました」

「何をしたんだいったい……」

「あ、お前まさかさっきの断末魔ぎゃー……っ！」

「？どうした、レイス断末魔あげて」

「な、なんにもないっす」

「そう？」

はあ、このあと呼び出し……。
やだなー。

「よし、来たか馬鹿」

「だが、馬鹿だ」

「あんな、初歩問題わからないやつがこの学園にいるなんて・・・
っ！」

「きもい」

「・・・」

なんなんだこの教師は。

「よしまあ、おまえを読んだのは、この書類手伝って？」

「・・・は？」

「この書類手伝って？」

「・・・逝きたいの？」

「物騒だなーいいじゃないかこんなかつこいい先生と一緒にだぞ？」

「逝け、ナルシスト」

「今日、なんか機嫌悪くない？」

お前のせいだよっ！

くっ確かに顔だけで行けばそれなりのシチュエーションなのに、性格がよ。

こんな美形をカバーするほどだよ？残念だよ、私が。

「残念な美形めっ！」

「え、急に何！？そしてけっこう失礼！？」

え、というかこの人ほんとに雑用させるき？

補習とかこのあとはいってるんだよ？まじで？

ストレス発散って大事だよね！（後書き）

短くてすいません・・・

新しい小説書いてるので、気になった方は読んでみてください！

もはや、いじめだろう(前書き)

PV15000アクセス、ユニーク3000突破!

皆さん本当にありがとうございます!これからもがんばりますので、
よろしくお願いします!本当にありがとうございます!

久しぶりな投稿です!

なんか先の展開しか浮かばない・・・

もはや、いじめだろう

「おまえ、マジ馬鹿じゃないの？この後補習とかあるって言ってんじゃん、ねえ？」

「あれー？俺先生なんですけどー、何で生徒に切られてるんだ？」

「この、くそ男がつ、生徒に雑用手伝わせんなよ」

「うーん、俺もう、くじけそうだ！」

「チッ」

何なのこの人、なんかめつたに怒らない私がキレてイライラするレベルにうざい。

しかも何この手伝い、生徒にさせるもんじゃねえだろ。

「あ、その終わったら帰っていいぞ」

「まだ、あんのかよっ！」

「はい、なんですか今の？」

「すみませんでしたーっ！」

はい、いらついてやってたらいつもの倍ぐらい的が燃えました。

先生怖いっす、いらつきが消えるレベルに怖いんですよ、その美形スマイル。

かっこいいなあっ！タイプだよ、このやろっつ！

「次は、ちゃんとしましょうね？」

あれ、私前の学校では先生に褒められも怒られもなかったのに、こっち着てどうだよ、補修とか受けちゃって、落ちこぼれとか言われ（事実だよっ！否定できねえよっ！）、あげく何だこの前にいるお方は！眼が、眼がっ！威圧感パネエ！

- ボンツ！

「・・・はあ」

「！」

ちよ、溜息てっ！結構来たぞ、ぐさっと来たぞ、心に。

「っ、次行きまーす・・・」

「・・・」

沈黙・・・

「・・・生气失ってるわよ？」

「だめかも知んない、私もうマジで才能ねえ」

「・・・今更」

「だれが今更じゃっ！」

「冗談よ、決闘したけど強かったじゃない」

「どこが！負けたし」

「・・・お茶入れるわね」

（否定しないかー、ん、別に？きずついていてなんかいませんけど？悲しくなんてねえよー！）

決闘か・・・かつこつけてたがあの魔法は基礎も基礎な初心者魔法です。

ただちよつと無駄にある魔力を注いだんで結界壊せたんです、かつこつけてもそんなもんです。

今思えば、勝てる雰囲気だったけどアミーさん無独唱とか使えるんで、返り討ちにあつてたかもね！だてに落ちこぼれじゃないぜ

「どつぞ」

「あ、ありがとうございます」

オレンジジュースをもってくる。

「きょうの練習は、軽く貴女の魔力で普通に魔法が使えるか試すだけだから、そんなに疲れないと思うわ」

「はい」

「さっそくいける？」

「ん、はい」

「速く終わらせて休みましょうか、眠そうよ」

「眠いです」

うん、眠いけど夜ごはんも食べたい。

「じゃあ、始めましょうか？」

もはや、いじめだろう(後書き)

感想、コメント待ってます！

やっと休めるっ・・・！（前書き）

更新だいが遅れました・・・
すみません！

やっと休めるっ……！

「あ、そう言えば魔力を流すってどうするんですか？」

「そう言えば、言っただけじゃなかったわね」

「というか分かるんだろうか？」

「アミーさんは見えるとして、私は見えないし。感覚がつかめなそう。」

「この石をもって」

石を渡される。

普通の石ではなくどこか透明感があり、不思議な感じがする。

「その石に魔力を、そうねえ……まあなんか力を注ぐ感じで」

「てきとうだなあ」

（力、力……）

「！」

石が光輝きだす。

「な、なななんか光った！」

「それが魔力よ」

「これが……」

「そう、その石は魔力に反応し光るの」

「わーっすげーっ」

まだ、光り輝いている。

不思議と眩しくなく、優しい光。

「簡単でしょ？石なしじゃ分からないのがあれだけど」
「はい！」

おお、なんか結構いい感じだぞ私！

「はい、じゃあさっそく」

「え、あ、はい」

(なんか急いでるな)

まあ呪いの人形をもつてたら不気味だしそんなものか。

「あ、一つ聞いていいですか？」

「なに？」

「どうして私に頼んだんですか？幾ら魔力が大いいからっていつてもここにはジンさんやリディアもいるし、先生方もいるじゃないですか？」

「そっね・・・」

別に何か疑ったとかじゃなく、純粋な疑問として聞いた。

「なんとなく・・・かしら？」

「へ、」

「さあ、やりましょう」

「・・・はい」

この後の練習は軽い基礎ができるかとかをして、つかれていたこともあって、気にするのをやめた。

やっと休めるっ・・・！（後書き）

短くてすみません・・・

感想やコメントお待ちします。

・・・はい？（前書き）

PV二万アクセス、ユニークアクセス四千人行きました！

いや、もう本当にありがとございます！これからもどうぞよろしくお願いします！

「決闘」、「余計気になる」、「中継」を改稿しました。

「決闘」に関してはかなり書き直したので、お暇があるときにも見ていただけると嬉しいです。

・・・はい？

唇下がり、いつものように過ごす昼休み。

「・・・はい？」

「きゃ

「え

「きゃああああああつ！」

少女の絶叫が響く。

「あ、董

「こんにちは、さようなら」

「ちょ、ひどくない？そして機嫌悪くない？」

「眠いんですよ」

「はあ？」

昨日はいろいろあつて疲れたのにすぐ寝ずに、小説の更新チェックをして結局ねるのが遅くなった。

何があつてもそれを欠かさない自分が怖い。

「ちゃんと、睡眠とれよ体調崩すぞ」

「おかんめ」

そつち系だったかレイスよ。

長男かしら。

「じゃなくて、噂聞いたんだよ」

「はあ？噂？あれですか、リリーの先生と生徒ができてるって言う」

「は、何それ！？違うけど、すんごい気になる」

「で、違うならなんですか」

「・・・今日きついな」

「で？」

「・・・呪いの人形の話だよ」

「詳しく」

レイスのいるほうを向く。

「それが、人」

ちよつと真つ直ぐと右に分かれる場所。

そこを通る時レイスの背後、歩く生徒たちの中に女の子たちが歩いていて、その頭上に何かが落ちてくる。

「・・・はい？」

私が立ち止り、レイスが首をかしげる。

「きゃ」

「え」

「きゃああああああつ！」

叫び声に一点に集まる人、かすかに見える鮮血、見覚えのある茶髪の巻き髪。

「アミーさん！」

人だかりに走る。

「あ、おい！」

レイスが遅れてくるが、すぐに並んび、人だかりをかき分けアミーのところまで行き、近くに座り様子を見る。

気は失つてるようで、顔色は元の肌が白いだけに青冷め、流れる血が痛々しい。

「董、治癒は使えるか？」

「・・・使えません」

「だったら先に先生を呼んで来い」

ここは近くに先生がいるような使ってる教室がなく、ここには生徒だけがいるのがほとんど。

今も先生の姿は見えない限り先生はきずいてないのだろう。

「分かりました」

「ああ」

レイスは傷口に手を当て軽い治癒魔法をかける。

治癒魔法は魔法使いによってはどんなものでも治せる。

しかし、免疫力が下がるとの理由でほとんどの人は怪我を事情がない限り使わない。

なので、レイスも完治させるといよりも浅い、軽い傷にさせている。

その間に私は、床に手をつき校内に意思の疎通、視覚を校内全体張り巡らせる。

(・・・いた)

視覚を戻し先生に向かって走る。

「！おいっ！そっちじゃなくて職員室は逆だろ！」

レイスが叫ぶ。

「こっちにつ、いる！」

走りながら答えたので、言葉が少し途切れる。

「はあ!?!」

「もうすぐで、会えるね賢者の石に」

男は恋い焦がれ、愛しい恋人へやっと会えるかのように言う。

・・・はい？（後書き）

感想、コメントなどいただけたら嬉しいです！

幸薄美少女（見た目）

「わたせ」

「・・・え？」

ベットに座り頭に包帯を巻いた美少女にっこりとした笑顔で少女が言葉をはなつた。

「大丈夫でしたか!？」

「ええ、大丈夫よ。ちよつと痛いけど。二人ともありがとう」

「いえいえ」

「・・・」

アミーさんを前ににやけているレイスを横目でにらむ。

「ちよ、そんな目でみんなよ!」

「アミーさんなにがとどういうかどうしてと言っか、まあ・・・何で？」

「これもちがうか・・・」

「むっしー」

「まあ、ちよつとね」

すこし目をそらし微妙な表情をする。

(?・・・そういやー物が落ちてくる「みたいな感じのことを・・・

・ 人形かぁー！っ！！)

「レイスちよつとはずしてもらえる？」

「？」

「女の子同士の話ですよ」

「あ、ああ」

微妙な威圧感を感じたのかすぐに出ていくレイス。

「で、アミさん」

「んー？」

まだ目をそらす。

「わたせ」

「・・・え？」

この言葉を予想していなかったのか少し目を見張る。

「人形のせいでしょう」

「えっと、まあたぶん？」

「私が預かります」

「え、いやちよつと、それはだめよっ！貴方が」

「大丈夫です」

「なんで・・・」

「だって言ったでしょう？最近ひどくなっただって。だったら私が持てば最初はひどくないでしょう？」

「だめに決まってるでしょ！それで怪我したらどうするの！？」

「あんたでしょうが」

「うっそれは・・・」

「大体上からもの降ってくるって、一歩間違えば亡くなりますよ！
？アミーさんは黙って私に任せてください！」

「でもっ！」

「・・・だったら、ジンさんに頼みますから」

「え？」

「それならいいでしょう？」

「えっと」

「いいでしょう」

「は、はい」

少しすごみ、まじめに言っつてやっつと了承をくれた。

「じゃあ、デマンドボックス 求めの箱あるんであけてください」

「じゅ、準備いいわね・・・」

「だいたい何かあったらと思っつていっぱい持っつてるんですよ。何が
あっつても対応できるよっつに」

「ふーん」

「・・・じゃあ、ほんとにいいのね？」

「はい」

取り出した人形を片手に問う。

そして返事をしながら受け取る。

「じゃあ、そろそろ私は帰ります！無理はしないよっつに！」

「はは、大げさよ。治癒もしてくれまし。今日は本当にありがとう
ね」

少し、眉を下げながら心配をするよっつにお礼を言っつ。

「・・・どういたしまして・・・」

白く、薬品の香りの部屋を出る。

「お、あれ？もうかえんの？」

「帰りますよ。レイスがいたらうざいらしいですよ」

「ひどっ！絶対それお前がだろ！」

「結構悲しいこと言ってますよ・・・」

軽く口争いをしながら考える。

（しかし、ジンさんに頼むわけにもいかないし、どうするか
解除魔法が乗ってる本が確かあったかも知れないな・・・今日探
すか）

幸薄美少女（見た目）（後書き）

感想やコメントもらえると嬉しいです。

求めの箱・・・所有者が開くと望む所有物が箱に入ってる。

魔導書

(・・・ない)

ない、あつても意味がわからない。

はい、ただいま解除魔法ののった本を探しているんですが、ない。いやあるんだけど、読めない。

本大好きな私はこっちにきて、やっぱこっちの本にはまり休日日本屋はしごとという日々を過ごしていたんですが、グリモワール魔導書を買ったんです何冊か古本で。安いんだけど。

だって古本でも値段やばいよ？おいてても誰も買わねえだろ、という突っ込みさえも浮かばないほど、そのなかから安い変えそうなの探すのに何件本屋回ったか。

(これは・・・まだ解けてないんだよな・・・)

そう、魔導書読むにはある問いに答えなければならぬ。

それを解析するのに時間がかかる。まだ何冊かしかとけていない。しかも種類が生い立ちやら年号やらいろいろなのだ。

「・・・何してるの？」

「あー・・・本探し？」

後ろでフィリアさんが問いかける。

「何の本を探してるのよ」

「えっと解除魔法がのってるのを探してるんですが・・・ないんですよねえ」

「教えましようか？」

「え、本当　　っだあつ!?!」

「何よ、だあつて……」

「え、本当っすか!?!マジで!?!」

「宮廷魔術師なめないですよ?」

「あつわす、いえ、覚えてます、すいません怖いです」

「……そう言えば、ジンに頼めばいいんじゃないの?」

「頼みにくいんですよねー」

「どうして?仲はいいでしょう」

「……何となくかな?人に物事を頼んだりするの苦手なんですよねー、頼られるのはウェルカムなんですけど」

「そう　　」

昔からかな、なんか人に頼るのが苦手なんだよなー。

気を使うというか、なんというかまあね?

ちなみに、それとは違うけど人に優位に立たれるのが大嫌いというね、だからといって優位に立ちたいわけじゃないんですよ。

ただ、母親とかお偉いさんとかかそう言うのは別にいいんだけど、
同い年とか先輩とかでめっちゃ上から目線の人がいるじゃない?こう、
俺様な人見るとサディスティックな部分が刺激されるといって、強
くて一匹狼の小説キャラとか居るじゃない?そういうのを見ると、た
たきつぶしたくなるというか、いじり倒したくなるというか、とり
あえずそのプライドおりたい。だからまあ好きなんだけどね。ある
意味。

「それに、秋史さんやジンさんに相談したら、なんか呪い解いて下
さいって言ってるみたいだしね」

「ちよつとわかるわよ」

少し目を見開く。

「そう、ですか」

「じゃあ、呪いはどれ？」

「今持ってきてますね」

すこし気分が軽くなった。

魔導書（後書き）

感想やコメントくれたら嬉しいです。

よかったら拍手ぽちっとしてやってください。

いつもと一っ違う日常

「おはよう」

「おはようございまーす」

リディアと一緒に朝食に行き、ジンさんとロドさんに挨拶をする。いろいろなことに使われるこの会場は長方形や円になったいろいろな大きさで形の机が不規則に置いてあり自由に集会のときは自分の属だったらどこでも、朝食などなら属も関係なしに自由だ。

「眠いですね」

「うん、全然」

私は年中眠い。

「董・・・お前よく朝からそんな・・・」

「ふつうですが？ジンさんが小食すぎるんですよ。むかつく」

「普通だろ・・・」

いや、マジでお前ら食細すぎるんですよ。

だってあつちじゃ普通だったよ？ま、まあたぶん、うんふつうだ。おなかすくよ？授業中。

「あー一時間目なんだっけ、リディア」

「法学だよ」

「よっしゃー！」

法学は、法律の勉強です、弁護士みたいな感じじゃなくて。

魔術師の時に役立つらしいです。依頼受けて討伐するときとか、色

々考えてどのような処置をするとか、私大好き、この授業！なんか好き！

「よく好きだよね、あの授業」

「え、楽しくないですか？」

「全然」

「全然とかいいながら成績いいくせに」

「好きとできるは違うからね」

「あはは」

くっそ、これが天才の余裕か・・・！

笑顔で言い切ったよ、この王子顔が！

嫌味臭さがないのが、嫌味だ。

ひきつった笑顔がでたぞ。

「神山」

どこの声優かと思うほどの美声が名前を呼ぶ。

「はい」

「今日の休み時間に俺のところにくれるか？頼みたいことがあるんだが」

「わかりました」

秋史さんと知り合いということとは、たぶん誰も知らないだろう。

別に隠すわけでもないが、何となく知り合いとも言えず、タイムミン
グを逃してこの何の関係もない普通の先生と生徒に落ち着きました。
まあ、実際もただの先生と生徒ですがね！

「何のたのみだろうね？」

「さあ・・・教材運びとかじゃないんですか？」

そして、一ついつもと違いある人形を持ち運びながら、いつもの日常に戻った。

いじもとーいじの日常(後書き)

感想やコメントももらえると嬉しいです。

振り払い（前書き）

短いです・・・すみません

振り払い

「なんですか？」

「俺に言うことがあるだろう？」

・・・マジでこの人、監視カメラでも仕込んでんだらうか。

「だーからー、別に何にもないですって！」

「何でもなくないだろ！」

何も言わない私にいらつき、それに私がいらつきという悪循環を繰り返しながら。

監視カメラだと思ったが、何かしたということが分かったただけのようであんまり安心した。マジで、本当に。

「あるだろ？取りあえずいえ！」

「いやだっ！」

「あーもう、どうして、そう駄々をこねる!？」

「・・・」

あ、きたこれ、すごい、きました今の言葉。

ど、う、し、て？駄々？

・・・どこが駄々こねてるだ。

「へえ？駄々？そんなの誰も駄々こねてないだろ！」

「お前のそれは我がままと言っただ。何かあったらどうする？」

私が軽く切れたのがわかったのだろう。
軽く睨むようにして、声を低くし、忠告をするような口調でしゃべる。

日頃ならこれで落ちていただろう。いや今も若干怖いが。ちょっと後悔押し寄せてるが。

いかんせん、状況が状況。私は切れていたのだ、軽くとはいえ、本気で。

「何かあったら？あっても別にいいでしょう。貴方には関係ない」

「関係があるから言ってるんだろう？あつたら俺が困るんだ」

「別に貴方が困ろうが私のしつた事ではないでしょう？どうでもいい」

「俺はお前を頼まれたんだ。お前に何かあれば　俺はどうや

つても助ける。そのせいでお前がどう思おうが知ったことではない」

まるで、誰かに頼まれた物を護るように言う。物には何も思わない。ただ頼んだ人が大事だから。

底冷えするような瞳で、美しい顔で私を見下ろす。私に対して何の感情も映さぬ顔で。

「・・・ふっ、ふふっ・・・そうですか、私がどう思おうが関係ない。
頼んだのは母でしょうか？でしたらもういいです、母には私が説明する」

「お前、」

眉を少し顰める。そんな顔を見て、外に出るためドアに行く。

「まて」

先ほどと変わらぬ表情で私の腕をつかむ。

それを一瞥し腕の持ち主をキッと睨み、そして笑顔を作る。

「よかったですね、お荷物が減って。もう関係もございません。では、さようなら。もう金輪際一生かわりませんので、ご心配なく」

思いつきり手を振り払い、一気に廊下をかけた。

厚くなる眼頭をこらえながら。

振り払い（後書き）

きれたらドライな秋史。最低、最悪、ドライ、マジないはこいつ・
・とか思いつながら書きました。ちなみに董のキレゲージはまだ三割
程度です。冗談でしか切れたりしないので、本気はあまりないです。

感想やコメントもらえたら嬉しいです。

ハロウィン〜記憶の肖像〜（前書き）

本編と一応繋がっております。

でも、入れる予定もなかったなので番外編と付けておきました。

1 / 14 番外編をとりました。

ハロウィン〜記憶の肖像〜

「こつち、こつち。大丈夫？」

「うん、ほこりすぎいな・・・」

薄暗く使われた形式がない教室に足音がひどくよく響いた。

・トントントン

指を苛立たしそくに鳴らしながら、頬杖を付きページをめくる。

「・・・」

あからさまに不機嫌そうな少女は初めてのみる本もただページをめくるだけになっている。

「・・・なにをそんなにいらついでなの？」

「・・・別に」

「？」

「ただ、ちょっと。いやむしろちょっとじゃ、ない。大体」

「ちょっと、」

「何で」

「ちよっとー、ちよっと」

「！わ」

頭によじ登り、思いつきり髪をかきむしる。

「ちよっ、わ、す、すんません！ほんと、すんません」

思いつきり引つ張るのも加える。

「どうしたのかしら？」

「ふー……。知り合いが、
「が？」

「こっちは結構いい関係を築けたと思ってたのに、あつちはただ人に頼まれたただだからお前の気持ちはどうでもいいとかいわれ……。そつですよっ！なんであそこまで言われなきゃいけないんですか！
「？」

「知らないけど……。相手最低ね」

「でしょう！？だったら最初から冷たく当たればいいのに」

「そつよ、こっちに気持たせておきながら、こっちがその気になるとすぐふって！」

「ですよ！だいたい、言い方つてもんがありますよね！？」

「デリカシーのかけらもない！」

「そつですよ」

「そつよ」

軽くヒートアップしていた会話をひとまず休む。

「……」

「……」

「……あ、あら！？その本の肖像画、この学校のじゃない！？」

「え、あ、そつなんですか！？」

軽く気まぎれになった空気を無理やり持ち直す。

「ええ、確か二階の教室に・・・」
「へー・・・」

「と、言う話を聞いたんです」

秋史さんへのいらだちはあるがそれでいらついでのもあれなので、頭の片隅に追いやる。

「へー」

「どこにあるのか見てみたいよねー」

「・・・見に行く？」

「え」

「たぶん、二階の歴学の資料室の奴だよ」

「ばれないかな・・・」

「うん、あんま使わない資料ばかりだよ」

「・・・行く？」

「行っちゃう？」

顔を見合わせてにやりと笑う。

「これか？」

「うん、本に載ってたのは確か・・・これ」

「・・・くるよ」

「え」

『じつじつ...』

「レース？」

「リディア？」

「記憶の肖像」

「・・・ああ！」

「え、私わかんない！？」

成り行きで一緒に来ることになったレースとリディアは何か分かっているようだ。

（がんばれ、私の記憶！

わっかんねえ！）

『では、問う』

「へ」

「ばっか！」

「え、なにが？」

「くっそ」

「ぶっ」

口をリディアに後ろからふさがれる。

『もう、遅いわよ』

「はあ」

「え、なに？」

「・・・この肖像は、問うと言ってから一分以内に最初に喋った者に問いを出すの」

「・・・」

え、それって・・・え？とりあえず・・・。

「すみませんでしたあああああ！」

「大丈夫だよ」

「答えられれば問題ないだろ」

ああ、君たちまじ天使。

『そうね……。ここに貴方達の前に来たのは誰かしら？』

「……」

(し、しらねえ！)

「……人？」

『……その答えはだめよ』

「やっぱり！」

『じゃあ、ひと時私を楽しませてね』

「へ」

眩しい光が現れ、あっという間に全体を包み込んだ。

ハロウィン〜記憶の肖像〜（後書き）

感想やコメントお待ちしております。

拍手にハロウィンの会話的なものもあるので、気が向いたらみてや
ってください。

ハロウィン〜記憶の肖像〜2 (前書き)

ハロウィンだいが過ぎちゃいましたね……。すいません。

ハロウィン〜記憶の肖像〜2

「っ……っ」

ゆっくりと目を開ける。

急に包まれた光はなんだろうと考えながら違和感を覚える。

(どこどこ?)

いや、いやいやさつきこんな装飾とかなかったよね。

埃の積もっていた空き教室が一転装飾された部屋になっている。

確かにくもの巢はあるが作りものだ。オレンジ色と黒をモチーフにしかぼちやを顔の形にくりぬいた世間一般で言うランタンが飾っている。

(ハロウィン? ……時期違うだろ……)

それよりさつきはなかった、こんな装飾は。

『ここは、過去』

『はぁいいいっ! びびったー……』

『貴方達はあることをしてもらっ』

『? いや過去って……』

『問題不正解だったでしょう?』

『あ、はい』

『だから私の願いを聞いてね』

『えっと、はい』

人は驚き過ぎると冷静になる生き物です。現実とかけ離れ過ぎて。

もう真実味感じれなくて。

『ここで、貴方の知り合いと喋ってみて』

「・・・リディア、レイス？です、か？」

『その人たちはだめ。その人たちにも一緒の条件を出した』

「知り合い・・・いない場合は」

『大丈夫よ。いるから』

「そうっすか・・・」

いないの狙ったのに。くそっ。

『じゃあ、行ってらっしゅい』

「え、ちょまつ！」

早いよ、お姉さん。

(・・・取りあえず出てリディアたちがそ)

どこにいるかな、というかハロウィンかな。
いろんなことを考えながら扉を開けると・・・。

「くっそ・・・どこいんだよ・・・」

「あっちさがそ」

「ここいないってー」

(なんか、探してる?)

「・・・あ」

「っしー！」

「「「いたーっ！」「」」

「?」

ハロウィン〜記憶の肖像〜2（後書き）

何でハロウィンあるの？とかはなしですよ。そこはファンタジーです。

そして、まだ続くようです。

感想、コメントもらえると嬉しいです。

ハロウィン〜記憶の肖像〜3 (前書き)

番外編・・・じゃないな・・・すみません・・・まだまだ続きます。

ハロウィン〜記憶の肖像〜3

どうしよう。

どうしよう。

「ま・・・じつで！はあ・・・きついん・・・です、けどっ！」

なんで追いかけてらる、私。

なんで追いかけてる、生徒たち！

(え、ちょ、まじ、なんで？くっそ！)

「我が魔力、地と共に」

魔力を地の属性にさせる。

「蔦の、壁！」

床は壊すと怖いので、窓から伸び出してきた蔦が組み合わさり壁になる。

さして、うわつと声を上げる生徒たちの足止めに成功をさせる。

その間に近くにあり広大で、迷路のような図書館に駆け込む。

(私今日運いいわ・・・)

いや、まあこの状況に居ること自体運が悪いつちゃあ、悪いんだが。少し入り、近くの本棚にもたれるようにして、床に座り込む。

「」

(！)

話声が聞こえる。複数の。

(・・・やっブ)

声が聞こえるのは、広間のほうだろう。

(・・・ちょっと近付いてもばれないよね)

好奇心が疼き、四つん這いになりながら近付く。

(・・・1、3、・・・6？いや7人か。・・・さっきから気になるんですけど・・・)

仮装？

なぜ仮装？いや、ハロウィンでもここまで全員がするか？
みた限り全員がしていた気がする。

(行事？いや、でも、学校で？・・・しそうだな)

ちょっと楽しみじゃないか。準備しとこう。

「貴方達も、サボってないで探したらどう？」

「そうよ・・・先生も言ってることだし・・・」
「大丈夫ですよ。ミューもまじめだな」
「う、うん・・・」

みてる限り、一人は先生っぽい。しかし

(?)

「ま、俺なら10分あれば見つけれらるしな！」
「うっざ」

「事実だろ？」

(いや、いよまさか・・・)

「ほんと、どうしてこんなのが学年1の優秀者なんですかね」
「なにいつてんだよ、学校だろ？」

「死ね」

「ひどっ！」

知り合いつて・・・

(あの3人かあああああああああ！)

無理だ。なんでよりによって、

(母さんに秋史さんにライツ先生！？)

おかしいだろう選択肢！

母さん私知ってるし、秋史さん喧嘩して若干うざいし、ライツ先生
好みだし。学生姿やばい。

(秋史さん、22で、学生だったら・・・7、5年前?)

無理無理。

(なんで、あのメンバーなんだよ)

取りあえず、先にリディアたちを

「!」

口をふさがれる。

(っ誰!)

口をふさいでいる手を両手で押さえ体を使い後ろを向く。

「じーーーーっ」

自分の口に手を当てこちらに小声でこちらに話しかける少女。

「リディア!?!?!?!とレイス?」

こちらも小声で返す。

「うん」

「よくわかったね・・・こっつて」

「精霊に聞いたの」

「ああ」

便利だ。羨ましい。

「あ、そう言えば、話す相手ってあの三人だろ？」

「あれ、レイス知ってたの？」

「いや、こっち来る途中あの王宮魔法師期待の若手と名高いルイ・キープがいて、あ、ルイ・キープって」

「あ、そこ飛ばして」

「・・・まあその人が第一学年だったから、この時俺らが知ってる
と言えばあのかの有名」

「あの三人ね、うん」

「そういうことで、精霊に聞いたら童と同じ場所に居たの」

「はあ」

レイスのマニアっぷりには突っ込みもしないまま、話を進める。

「ちなみに何年前？」

「五年前。あの二人は第三学年」

「・・・」

「どっし話しかける？」

ハロウィン〜記憶の肖像〜3 (後書き)

魔術設定はのちほど登場人物と一緒に投稿したいと思います。

ハロウィン〜記憶の肖像〜4（前書き）

【番外編】をとりました。ほんともうタイトル詐欺ですよね・・・すみません。

ハロウィン〜記憶の肖像〜4

「まず服だよな」

「なんで？」

「この学校伝統なんだよ」

。 伝統。ロード学校。・・・しょーもなさそうな伝統感が漂うな・・・

「ハロウィンには全員仮装。そんで例外の制服姿の奴を捉まえるんだよ」

「・・・この学校は学生の本分を忘れてやいないかい？」

「いない。いない。はつきり言えば、実戦の大きい版みたいな感じだからね」

「実戦？・・・え？」

いやいやいや。まさか・・・。

「旗の代わりに制服の人捉まえ、る？」

「そう。魔法も、体術、剣術、なんでも大丈夫。殺さなければ」

「体術、剣術も？」

「うん。だって剣や体にのせる魔法もあるでしょう？」

そう言えば、私はとってないけど剣術と体術の授業あったな。

「ま、それでこの姿はやばいんだよ」

「ああ・・・」

攻撃しかけられたしなあ・・・。

「どうする？」

「そこだよねえ」

「いっそとつげ」

「

「お前ら！」

扉を思いっきり開き、大声で男が怒鳴る。

髪は長めで、ウェーブがかかっている、なんか、取り巻きというか、そんな感じで男女四人はべらかしてる。

(わー美形)

「あ、ウィル君どうしたのかな？そんなに怒鳴って」

「どうしたのかな、ではない！何をサボっている！」

「え、何心配してくれたのかな？本当に僕が好きだね」

「やめる！気色悪い！」

秋史さんとウィル？さんが言い争う。

「で、なんだ？」

「おまえっ俺との勝負はどうした！」

「え、ああ！」

「忘れてたな！？」

「え、ちよこれどうする、レイス」

「え、俺！？いや、取りあえず、いや、えっと・・・ひとまず」
「で身を隠す！」

「あ、普通なんだね」

「・・・」

「また、やってるし」

「ウイル君も秋も飽きませんね」

「・・・」

「ああ・・・」

「見つけた！」

ウイルさんの周りにいた一人が叫ぶ。

「ウイルさんそこいます！」

「なに!?!」

「え、ちょ、ばれた、ばれた！」

「あ、やっべ」

「どうする?」

リディアなぜにそんな冷静。

「とりあえず、出ちゃおう！」

「え」

「ま、そうだな」

「は」

え、そんな感じ?もう堂々としちゃう感じ!??

「こんにちは!」

レイスーーーーー！なんだよこんにちはって！

「はじめまして」

なんで、リディアも挨拶しちゃうかな！？

「……」

まえが見れない。

忘れてるよね二人とも。

「すみ、ね？」

あれ、私の母親ですよーーーーー！！

ハロウィン〜記憶の肖像〜4（後書き）

感想、コメントもらえたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5557u/>

私の魔法学校体験奇

2012年1月14日14時46分発行